Kwansei Gakuin University

小林昇の戦争体験と戦後非啓蒙のひとつの基点

Noboru Kobayashi and A Legacy of World War II

竹　本　　洋

Noboru Kobayashi (1916-), historian of economics, served in Vietnam at the end of World War II. He found that the Japanese Army Bureaucracy was corrupt and recognized himself as slave. At the same time, he was conscious of his own responsibility for Vietnamese. He, therefore, regarded himself as a sinner after the war and has since been studying the history of English and German economic thought with such a view. His case is a model of counter-enlightenment in post war Japan.

Hiroshi Takemoto

JEL：B31
Key words：World War II, Vietnam, counter-enlightenment

「この地上に生きる人間は兵役にあるようなもの」（旧約・ヨブ記）

はじめに

政治家は戦争の大義を唱え、歴史家は戦争の歴史的な意味づけをし、教育者は戦争の国民的意義を説き、軍人は戦争そのものの意義を次のように訴えた。

> たたかひは創造の父、文化の母である。試練の個人に於ける、競争の国家に於ける、斉(ひと)しく夫々の生命の生成発展、文化創造の動機であり刺戟である。[1)]

1)　陸軍省新聞班「国防の本義と其強化の提唱」1934 年、『現代史資料（5）・国家主義運動（二）』

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

それでは戦争に赴き、「敵」と闘ったひとりひとりの兵士にとって、戦争とは何なのであろうか。それは人それぞれであり不用意な一般化を拒むことであろう。だがどの兵にとっても、召集はそれまでの生活からかれを切り離し、日常とは縁のない銃をその手に握らせたのである。その生活の唐突な中断が戦死によって永久(とわ)のものになった者も多いし、さいわいにも生還をはたしてもとの生活に戻れた者もいる。なかには精神や肉体に傷を負い従前の仕事に戻れずに、あらたな苦闘の日々が始まった者も数知れずいるであろう。それぞれの兵士の親や兄弟や妻や恋人の生活や人生にも大なり小なり戦争の影がおちたに違いない。

おかれた状況や境遇は各人各様であったにしても、戦後はある面からみれば竹内浩三が歌ったようにして始まった。

がらがらどんどんと事務と常識が流れ
故国は発展にいそがしかった
女は　化粧にいそがしかった[2)]

その戦後が始まる 1 年前の 1944 年 8 月、ひとりの補充兵が金沢の師団に入隊した。福島高等商業学校の教授であった小林昇である。小林は金沢から門司へ送られ、そこから船団を組んで南方へと向かう。小林らの兵と軍衣などの軍需品とをのせた輸送船・日永丸は、11 月 15 日仏印（ヴェトナム）のパダラン岬の南西海上でアメリカ潜水艦の魚雷を受けて沈没し、35 名の行方不明者を出した。[3)] 小林は 12、3 時間海上を漂ったのち運良く海防艦に救助され、サイ

みすず書房、1964 年、266 ページ。

2) 竹内浩三「骨のうたう」小林察編『戦死やあわれ』岩波現代文庫、2003 年、3 ページ。引用は中井利亮補作の「骨のうたう」による。原詩では当該箇所は次のようであった。「がらがらどんどん事務と常識が流れていた／骨は骨として崇められた／骨は　チンチン音を立てて粉となった／ああ戦死やあわれ／故国の風は　骨を吹きとばした／故国は発展にいそがしかった／女は化粧にいそがしかった」（同、152 ページ）。この詩は 1942 年に作られたもので、本文で「戦後」というのは竹本の読みかえである。

3) 駒宮真七郎『戦時輸送船団史』出版協同社、1987 年、287-88 ページ。日栄丸での体験は、小林昇「海難私記」『未来』1968 年 6 月号（『私のなかのヴェトナム』未来社、1968 年に収録）に記されている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ゴンにたどり着いた。これからヴェトナムでの１年半余の兵卒としての「たたかひ」を経て、1946年４月に生還をはたし教職に復帰した。ヴェトナムで「一期（いちご）の旅をしつくした」という小林が、旅で何を見、何を得、そしてそれを戦後の生活にどのようにつなげたのだろうか。

1. 官僚機構としての軍

海防艦に救助されてサイゴンに上陸した小林は、戦況の悪化とともにマニラからサイゴンへ移った南方軍総司令部（南方総軍）の作戦部第一課の編成班に「机仕事」を与えられた。そこで小林がみたものは官僚機構としての総軍であり、ヴェトナムの全戦闘を通して向き合わざるをえなかったのは近代国家の統治構造の宿痾というべきものであった。

総軍の将校たちは、その風貌、服装、物腰、そして何よりも勤務態度において高級官僚以外の何者でもなかった。かれらは「一様に明るい自信に満ちた風貌と態度と持っていって、南方の気候に合わせた、とりどりにかなり自由でなかなかシャレた軍装をしており、上等の革カバンを上手に小脇にしてリセ〔総司令部〕の門に出入りした。」かれらは司令部の外に当番兵つきの宿舎をあてがわれ、「大部分がいかにも栄養が良さそうで、気楽そうで、執務期間中だけ『軍務』を処理して夜は自分の時間を楽しんでいるように見えた。」つきつめていえば、「総軍全体が一つの事務機構であるにすぎず、高級将校たちは勤め人であり事務官であって、ここでは武人だという資格はまったく不要だろうと思われた」（傍点竹本）のである。[4)]

前線の将校でさえ軍人ではなく事務官僚にすぎないとすれば、かれらに「責任を感じている人間の顔」を一つも見いだすことができなかったのは無理はない。その仕事ぶりは、編成班の責任者である少佐が、＜事務ハ須（スベカ）ラク積極的電撃的ニ処理スベシ＞という標語を小林に書かせて壁に貼らせ、後任の編成班の責任者の少佐がそれを＜あせらず、仲良く、休みなく＞と書きあらためさせ

4) 『私のなかのヴェトナム』77-78ページ、小林昇『帰還兵の散歩』未来社、1984年、48-50ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

た一事で推測される。[5] やがて小林は、部下の生死をその手に握っているはずのこれら将校たちの無責任さと、兵士の背後にいる国民の命運にたいする鈍感さとを十分に味わう場面に遭遇する。アメリカ軍のヴェトナム上陸が噂されたころ、総軍のＭ大佐の内地への転属が決まった。Ｍは官僚になるときの成績が優秀であったために、その「身の保全」が優先的にはかられたのである。彼は離任にあたって挨拶し、「自分は諸氏の助力によって大過なく勤めを果たしてきたが、このたび内地…に転属の命を受けた。総軍を去るにあたり、諸氏のいっそうの奮闘を祈り、みずからにはいっそうの努力を課すものである」と挨拶した。小林はこれに強い反発をおぼえた。

> 紋切型を使うにも限度というものがあろう。南方各地での戦闘はことごとく敗れ、祖国は敗戦の淵にまで追い込まれ、その諸都市は焦土と化しつつあるのに、南方総軍司令部の実質上の責任者がみずからを「大過ない」と感じているとは。彼はおそらく現代の軍人という官僚として、その権限内でみずからが作成した書類について過ちのなかったことを信じえたのであろう。しかしそれなら、わたくしたち庶民（軍隊用語では地方人）を家族から引き離して使役しながら死に追いやり、しかもそれが無益であったことの責任は誰に帰するのか。レイテその他の島々で現在も殺戮を蒙っている兵士たちの魂を誰が鎮めるのか。[6]

小林は庶民の立場から、「無益な死」を兵隊たちに強いた参謀の責任を強く問いかけたのである。しかし続けて「わたくしはＭ大佐へ怒りは感ぜずに、軍＝官僚機構への絶望を深くした」として反発を怒りには転化せずに、そうした将校を生む官僚機構としての軍の無責任体制にたいする絶望・諦念となって胸奥に深く沈められてしまう。

将校がたんなる高級官吏であり、その身に責任を処する覚悟がないとすれば、倫理的頽廃がかれらに巣くうのは避けられない。北ヴェトナムのクレール

5)　『私のなかのヴェトナム』、77，79 ページ。

6)　小林昇「ヴェトナムに根ざす」『帰還兵の散歩』52 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

川沿いのチェンクァンに駐留したおりの経験が語られる。チェンクァン郊外には将校専用の女性の施設があり、当番兵が念入りに手入れをしたシャツとズボンと単靴という軽装に身を包んで、表門衛兵に立った小林の「表門警備中異常アリマセン」の報告に「おう」と鷹揚に答えて夜遊びに出かけることがしばしばであった。この「おう」には自分だけが夜遊びに出かけるいくらかの後ろめたさと照れとが含まれていたのかも知れないが、遊びが意に添わなかった宵の「その捧げ銃は遅い、もう一度」といったたぐいの衛兵にたいするからみには、不条理な腹いせ（いじめ）しかみてとれない。「大隊長ににらまれる衛兵というものは、暴力団にからまれる市民よりもずっと弱い立場だから、…ともかくもこの前門の不機嫌男に通りすぎてもらわねばならないのであった。」[7)]

将校の夜遊びを伝えるこの文にはいくらかのユーモアが感じられる。だが、彼の遊興費がガソリンの横流しで捻出されていたことを知れば、ユーモアではすまされない。[8)] 小林がヴェトナムにたどり着いた当時、日本はインドシナでのフランスの主権をまだ認めていた。アメリカ軍の上陸の危機が間近に迫っていると感じた日本軍は、1945年3月10日にクーデタをおこしてフランス軍の武装解除をおこなった。このとき中国領へ撤収したフランス軍は、ガソリンの詰まったドラム罐を各地に遺棄していった。将校が横流したのはこのガソリンであった。軍の物資の横流しは戦時中も戦後もいくつも報告されているが、サイゴンでは将校個人の遊興と結びついて起こったのである。

この隠匿ガソリンがこんどは小林の身に不吉な運命をもたらすことになる。

2. 捕虜の処刑、大飢饉、孤児

フランス軍のガソリンを狙ったのは、遊興費めあての日本軍の将校だけではなかった。ヴェトナム人も動機は別とはいえガソリンに目をつけた。裏門衛兵にあたっていたある晩、小林はガソリンのかすかな匂いを嗅ぎつけ、そのことを衛兵所に伝え、二人のヴェトナム人が捕らえられた。かれらは下士官たちの拷問にもたえて口をわらなかった。小林は「下士官の拷問に怒りを感じて、か

7) 『帰還兵の散歩』58-59ページ。

8) 小林昇「チェンクァンの記」『世界』第329号、1973年4月、301-302ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

れらを見逃さなかったことを悔やん」[9] だものの、処刑が決まり、小林はその使役を命じられた。

雨期の雲が低く垂れたある夕方に、この二人の捕虜は裏門の外に曳き出された。わたくしたち十人ほどの兵隊が下士官に率いられて、彼らを囲んだ。わたくしは正座させられたかれらの一人のすぐ前に穴を掘るように命ぜられた。トンキンの土は軽くて掘りやすい。そうしているうちに、せまい刑場のまわりにいつのまにかヴェトナム人たちが集まっていた。上の町からも下の町からも離れたこの空地でおこなわれることが、どうして何十人もの男女を集めるまでに知れわたったのであろう。この押しだまった群衆のなかに、あるいは殺される者たちの縁者がいるのだろうか。そういうことは知りようがないまま、下士官は群衆を追いのけることもなかった。刺殺の役目を命じられた兵隊は、日ごろおだやかな K 一等兵だった。軍隊では温和は小心とまちがえられやすく、K はこの際「鍛え」られることとなったのである。しかし K は、黙ったまま銃剣の一と刺しで、まったくやすやすと一人の犠牲者の心臓をつらぬいた。もう一人の捕虜は下士官が刺してみせたが、なかなか絶命しないのであらためて頸に軍刀が加えられた。二つのむくろはそのまま穴にけ込まれ、土をかけられ、他国人の環視のなかでその他国人に対しておこなう殺人が、かんたんに終わった。

使役の人数はそこで解散して、わたくしは土のついたスコップをかつぎ、K は帯剣をはずした銃を携えて、二人がいちばんしんがりに裏門をはいった。黙ったまま中隊にもどる途中に、特殊部隊の兵舎に使われている小さい建物があって、そこでふろが沸きはじめていた。「俺はふろを浴びてゆく」、K はわたくしにこう云い捨てて、兵隊ならばやれないはずのことなのに、他の部隊のあたらしいふろにはいりに別れていった。二人の加害者はこうしてそれぞれひとりになって夜を迎えた。[10]

9) 同、302 ページ。

10) 小林昇「加害者」『未来』1968 年 9 月号、『私のなかのヴェトナム』に収録、同書 102-104 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

この抑制のきいた情景描写はそれだけに読む者に深い印象をあたえる。それはまたジョージ・オーウェルの「絞首刑」(1931) を想起させるものでもある。[11] 解説を要しないが、現場の指揮官である下士官が捕虜に無用な苦痛をくわえたのに対して、温和なK一等兵が一刺しで「事」を済ませたこと、さらには刺殺役のK一等兵と穴掘り役の「わたくし」とが無言のまま帰営の途につき、Kが独りで風呂を浴びに別れる場面は、加害から逃れられない兵卒の、その胸底に沈殿されるやるせなさと孤独感とを伝えて余りある。

この文が逡巡をおして綴られたのは、ヴェトナム戦争で南ヴェトナム解放民族戦線のテト（旧正月）攻勢が始まった1968年のことである。小林はこの戦場での体験を「兵隊として避けがたい暗い体験」といい、このことが戦後の「わたくしの生活の基調を決定している」ものとした。[12] さらにそれから34年後、86歳になった年にあらためてこのことに触れた。「私はいまでも、外地で

11) 「絞首刑」は、オーウェルがビルマで警察官をしていたおりの体験をもとにしている。「…絞首台まであと40ヤードくらいだった。わたしは自分の目の前を進んで行く囚人の、茶色い背中の素肌をみつめていた。腕を縛れているので歩きかたはぎこちないが、よろけもせず、あの、インド人特有の、決して膝をまっすぐに伸ばさない足取りで跳ねるように進んで行く。ひと足ごとに、筋肉がきれいに動き、一掴みの頭髪が踊り、ぬれた小石の上に彼の足跡がついた。そして一度、衛兵に両肩をつかまれているというのに、彼は途中の水たまりをかるく脇へよけたのだ。妙なことだが、その瞬間まで、わたしには意識のある一人の健康な人間を殺すというのがどういうことなのか、わかっていなかったのだ。だが、その囚人が水たまりを脇へよけたとき、わたしはまだ盛りにある一つの生命を絶つことの深い意味、言葉では言いつくせない誤りに気がついたのだった。これは死にかけている男ではない。われわれとまったく同じように生きているのだ。彼の器官はみんな動いている…それがすべて完全に無駄になるのだ。爪はかれが絞首台の上に立ってもまだ伸びつづけているだろう。いや宙を堕ちて行くさいごの十分の一秒のあいだも。彼の目は黄色い小石と灰色の塀を見、彼の脳はまだ記憶し、予知し、判断をつづけていた——水たまりさえ判断したのだ。彼とわれわれはいっしょに歩きながら、同じ世界を見、聞き、感じ、理解している。それがあと二分で、とつぜんフッと、一人が消えてしまうのだ——一つの精神が、一つの世界が。(中略)

仕事を終えたわれわれは、すっかりほっとしていた。歌いたいような、駆け出したいような気分で、思わず笑いがこみあげてきた、とつぜん、みんなが陽気に喋り出した。(中略) われわれは刑務所の二重になっている大きな門を通って道路へ出た。…われわれは原住民〔ビルマ人の判事やトラヴィタ人の看守長〕もヨーロッパ人の区別もなく、みんなで仲良く飲んだ、死んだ男とは、百ヤードしか離れていなかった。」(小野寺健訳『オーウェル評論集』岩波文庫、1982年、25-26, 29, 30-31ページ。

12) 『私のなかのヴェトナム』92ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

日本の兵士たちに加えられた、戦犯としての処刑が、多くは不当なものだと信じている。しかし、このときの刺殺への私の参加の場合はどうだったであろう。私はトンキンで戦闘をおこなっていたために、敗戦後にそこに進入して来た蒋介石軍の方針のおかげで、個人としての戦争犯罪に問われることがなかった。とはいえ、おおげさないいかたでうしろめたいが、この日以来、私は自身の分けもつ戦争責任を忘れ去ることができずに生きてきた」(傍点小林)[13] と、この事件が小林のその後の生涯に戦争責任の念を背負い続けさせたことを記している。[14]

ところで小林に罪の意識を負わせたのはこのことだけではない。日本軍の兵隊の一員であることそれ自体が罪責感を芽生させることに遭遇した。トンキンの大飢饉がそれである。北ヴェトナムの食糧は、おもに南の肥沃なメコン・デルタと北の中国南部から米の輸入（補給）とに支えられていた。ところが北ヴェトナムに「駐留した日本軍（討(うつ)兵団）の主力が、紙幣を増発してそれらを大量に買付けたために、物資の不足とインフレーション、とくに食料のいちじるしい欠乏が生じた」[15] のである。さらに日本軍によるジュートなどの作付けの強要もそれに加わった。しかし決定的な原因となったのは、戦争の深刻化にともなって、南と北とからの米の輸送路が遮断されたことである。そこにソンコイ川の大洪水がおこり、トンキンは 1945 年から 46 年にかけて大飢饉に見舞われた。小林はその飢饉の惨状を実見する。「四方から流れついた農民の家族たちが、文字どおり骨と皮だけになって、街路に斃死してゆくのである。それは栄養失調の死ではなくて絶食の死であった。」[16] この飢饉による死者は

13) 小林昇『山までの街』八朔社、2002 年、87 ページ。

14) 事実に関することと触れておきたい。それはガソリン盗人がヴェトミンなのかそれともヴェトナムの住民なのか、つまり戦闘員なのか否かという問題である。この点は彼らが黙秘を通したことからも決定的証拠はないようだが、「加害者」では、「彼らはヴェトミンに売るためにガソリンを盗んだのではない。彼ら自身がヴェトミンなのだ、と確信するようになった」(『私のなかのヴェトナム』101 ページ）と述べられているのに対し、『山までの街』ではたんに「ガソリン盗人」(87 ページ）とされ、ヴェトミンであることを暗に否定しているようにも読める。しかし前者の明快な叙述をに従ってヴェトミンとしておく。

15) 『私のなかのヴェトナム』204 ページ。飢饉の原因については『山までの街』82 ページも参照。

16) 小林昇「ベトナム人はなぜ強い――解放軍・1945 年の思い出――」『展望』1968 年 4 月号。「飢饉のなかの解放軍」と改題されて『私のなかのヴェトナム』に収録。同書 14 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

200万人ともいわれている。

北ヴェトナムにおける日本軍の戦闘がこの大飢饉の間接的な、しかし有力な原因を作ったのである。それだけではなく日本軍は飢饉を座視したのである。すなわち「あのとき討兵団が確保していた食料で北ヴェトナムの飢民を何十万人も救えたはず」[17] なのに、軍は餓死者を見殺しにしたのである。

> 討兵団は…糧秣も豊富に貯蔵していた。敗戦後、ハイフォンで乗船して引きあげるまで、日本軍はとうとうこの糧秣をヴェトナム人にわたさず、洪水と飢餓とのなかで軍の移動とともにそれを輸送することがわれわれ兵隊のおもな仕事となった。大量の米・カンパン・味噌・醤油・砂糖・油・乾燥野菜などを、貨車に積み、貨車からおろし、川船に積みかえ、川船からおろし、また貨車に積み貨車からおろし、トラックに積みかえトラックからおろす、そんな労役をわたくしはかぎりなくつづけた。…日本兵は敗戦後何カ月分もの給料を先わたしされていたから、路傍の餓死者をまたぎながら町に出て、たっぷりと食事をしたり梅酒をたのしんだりすることもできた。[18]

飢餓に苦しむ人々を横目に「飽食」を続けたというこの事実が、餓死者にたいする罪の意識を小林にはっきりと自覚させたのである。それだけでない。飢饉は多くの孤児をもうんだ。そのことに気づかされたのは、後年（1964年）テュービンゲンへの留学の帰途、船上でカトリック神父と話した折であった。神父は北ヴェトナムから逃れてきた孤児の世話をサイゴンでおこなっていた。その孤児は飢饉からの逃亡者でもあった。[19] こうして、ヴェトナムの人々へ

---

17) 『私のなかのヴェトナム』206ページ。

18) 同、208ページ。

19) 同、184-187ページ。ヴェトナムでの出来事は、負い目を一方的に感じるものだけではなかった。そうしたものの一つに、ある文学者とのかかわりがある。
「チェンクァンではちょっとした手入れがあった。『アンナン人の文学者というやつも一人ぶち込まれたぜ』と、この事件には詳しいＩが教えてくれた…彼がＲ・Ｋという名前だということもＩから教えられていた。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の戦争責任は、餓死者だけでなくその子供たちの戦後にもおよぶべきものであった。

3. 軍隊における日常性の護持

暴力と餓死、そのほかにもう一つ性暴力の問題があった。場所はサイゴンである。

> 日本軍はこの目的〔兵隊の「肉欲の対象」〕のために、少数の朝鮮人の女性を文字通りの犠牲にした。わたくしはその場所を見にいったことがある。たしか植物園へ行こうとする途中のことであった。空地を板塀で囲って、そのなかに、いくつかの孤立した、小さな一部屋だけの小屋がある。小屋のはいり口には蓆(むしろ)が垂らしてある。強い日の照りつける下に、それぞれ何十人もの列ができていた。…この空地の風景は、輪姦の現場などということばで尽くせるものではなかった。日本のおこなっている戦争の本質が、この狭い場所の光景にはっきりと現れていた。そこには極端な凌辱と拷問とがあり、人間でなくてはおこなえない卑しい行為があり、同胞の兵隊に対する軍当局のこのうえもない蔑視があり、そのほかいろいろのものがあった。(傍点小林)[20]

朝鮮人慰安婦については、戦後早くに田村泰次郎が『春婦傳』(1947) で題材

二、三日して、他の監房から脱そう者が一人出たために警戒が厳しくなり、R・K をもふくめて囚人はみな後ろ手に縛り上げられた。R・K はすぐに音をあげたらしく、…<自分は脱走者とはなんのかかわりもない者だし、町にはしっかり保証人もいることだから、腕だけは自由にさせてくれ>と懇願する。そうしてやらねば食事も採れないわけだから、わたくしは苦労して衛兵司令に話をつけて、R・K の願いを叶えてやることができた。(中略) わたくしは営倉の窓の外でまたこっそりと R・K と、こんどは彼の持ってきている筆記具で、漢字の筆談をした。かれは感謝のことばを書いたのち、<外出したら郊外の草堂に立寄ってほしい。和光同塵の日のくることを切に望む>としるした。部隊がチェンクァンを引き払う日の直前にわたくしはまた外出して、偶然町なかで R・K と遭って別離の挨拶を交す機会を持った。(前掲「チェンクァンの記」『世界』302-304 ページ。)

20) 同、73-74 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

に取り上げたが、内外の関心をひくようになったのは1991年になってのことである。ある韓国婦人が元慰安婦であったと名乗りをあげたことによる。小林の上の文がそれよりも四半世紀前の1968年のものであったことにも留意したい。小林は、日本のアジア（ヴェトナム）での戦争が朝鮮人の女性にたいする「凌辱と拷問」とを伴って強行されたことに、この戦争の侵略性（アジアの解放ではなく）をみてとったのである。小林の認識はそこにとどまらなかった。慰安所を「同胞の兵隊に対する軍当局のこのうえもない蔑視」の産物ともみたのである。軍による兵隊の性の管理を人間にたいする蔑視とみなすこの認識のゆえに、小林は“慰安される”ことを善しとせず、「妻に一種の信義を守ってきた」[21]のである。海軍の軍属としてジャワで過ごした鶴見俊輔も慰安所へは通わなかったという。「早くから男女関係」をもち、不良少年であったことを自認する鶴見は、「いまさら国家のお仕着せで女性と交渉するなんていうのは、不良少年としてのプライドを傷つけるような気がした」[22]からである。鶴見の表現に多少の韜晦があるとしても、国家が個人の性に介入することに拒絶反応を示したのである。小林のばあいは、軍すなわち国家の威光のもとに植民地女性を凌辱することも、また国家から人間として侮辱されることも、ともに拒絶したのである。慰安と凌辱とは戦場におけるもう一つの暴力の盾の両面であり、国家の名において人間を奴隷に貶めるものであったからである。

小林が慰安を拒んだのは、『春婦傳』の春美のように、自分の肉体を武器に、兵隊の「絶対服従」の精神に風穴をあけ、「天皇に対する戦い」[23]を挑もうとしたからではなかった。売春を強要される朝鮮人慰安婦に自分とおなじ奴隷の

21) 小林昇「父の辞表」『父のいる風景 上』日本経済評論社、1982年、前掲『帰還兵の散歩』に再録、同書179ページ。小林は操守の理由を、「わたくしが妻に一種の信義を守ってきたことについては、父は反面教師の役を果たしているからかもしれない」と述懐している。

22) 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの――鶴見俊輔に戦後世代が聞く――』新曜社、2004年、64-65ページ。

23) 『春婦傳』の春美は、将校の成田副官から「ピイ」と蔑まれる慰安婦である。その成田は「天皇をかさにきて威張る」ことしか能のない男であった。春美には、成田の伝令として上官に「絶対服従」の態度を崩さない三上上等兵のほうが、「頭なのなかには、――肉体のなかにも、――いつも天皇が住んでいる」ようにと思われた。成田は軍機構のなかで天皇をたんに利用しているのにすぎないのに対して、三上には骨の髄まで天皇制が染みこんでいた。それゆえ、春美を目当てに毎日通ってくる成田を遠慮して彼女に近づこうとしない三上を誘惑し、自分の肉体の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

境遇をみて、その視点から日本の戦争の本質を感じ取り、戦場における買春を拒否したのである。それはひそかな抵抗ともいえるであろう。他方で、それは従軍という非日常的な日々のなかにあって、なお生活者の日常性の倫理を最小限でも守り通し、そうすることでオートマトンに堕ちることを免れようとしたのである。そのことは帰還直後の妻との会話で確かめられる。

> 私は二十一カ月ぶりで、無事に福島市に戻ってきた。それは生還であり、帰還であり、帰宅であり、職場への復帰であり、帰郷ともいえるものであった。…妻は危惧した以上にやつれていた。私は…重い私製のリュックサックを背負い妻と短い言葉を交わしたのち、北五老内（きたごろううち）の家まで、二人でゆっくり歩いて帰った。そうして、まだ人通りのすくない市中の道をたどりながら、私はサイゴン以来知らせることのできなかった自分の戦歴（？）を、妻は留守中の生活を、互いに簡単に報告し合った。（中略）あとで妻の語ったところでは、彼女はすでに見知っていた帰還兵たちの顔つきや行動や生活ぶりから、私の性格が荒んだことを恐れていたのだが、その点での私が召集以前とまったく変わっていないことを知って、安堵したのであった。（傍点小林）[24]

こうして小林はもっとも身近な者から、軍隊での生活ぶりを一目で認められその胸に迎え入れられたのである。

4. 底辺の哀感

虜にすることは、「天皇に対する戦い」だと直感的に彼女には感じ取られたのである。（田村泰次郎『春婦傳』銀座出版社、1947 年、再版、1947 年、34-35 ページ。）

『日本小説』創刊号（1947 年 4 月 1 日発行）に掲載を予定されていたこの小説は、GHQ によって「韓国人への批判」‘Criticism of Koreans’ 的表現が含まれているとみなされ、掲載不許可処分を受けた。そのため当該箇所を削除して同年 5 月に銀座出版社から刊行された。その経緯については『田村泰次郎選集』2、日本図書センター、2005 年の「解題」に記されている。また GHQ の検閲調書は同書の 347-349 ページに収録されている。

24) 『山までの街』107-108 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

沈没する輸送船からサイゴンに流れつき、敗戦後の捕虜経験をへてアメリカ軍の帰国船でハイフォンを離れるまで、小林はヴェトナムとりわけ北ヴェトナムの各地を兵卒として歩いた。そのかんのヴェトナムの風物にかんするみずみずしく細やかな描写は、文学者の中野孝次をして「近頃文学者の書いたものでも、これほど格調の高い、ぴんと張ったものに会ったことは滅多にないと思うくらい、静かで密度の濃い文章」[25] といわしめたのであるが、それは従軍のなかにあって、ヴェトナムの山野と町と人々の暮らしぶりとに子細な観察を行き届かせる冷静さと感受性とをよく保ちえたことを示している。例えば、わたしはつぎのような文にもこの項のテーマとの関連で注目する。

敗戦直前の 1945 年 8 月、小林の所属する連隊はハノイの北のタムダオの山に最後の拠点をおき、彼の小隊はトーチカ陣地の構築にあたっていた。衛兵所にあてられたホテルからはカトリック教会の塔がのぞめた。

> 塔には頂の真下に小さな窓が一つだけ穿たれていて、そこから朝の六時には、かるがると鐘の音が響きわたるのであった。六時といえば、霧の深い日にはまだまだ暗くて、夜の明けたことは気配としてわかるだけなのだが、鐘の音は時刻を違えずに、降るように鳴り落ちてくるのである。[26]

「かるがる」とした鐘の音色、それにもかかわらず「降るように鳴り落ちてくる」そのずっしりとした量感、そして時刻(とき)を告げるその音の正確さ、それはヴェトナムの人々の規則正しく堅実な、つまりは軽やかでもあり重厚でもある生活ぶりを伝えるものとして、小林の心に日常性にたいする敬愛と渇望とを二つながら呼び起こすように響いたであろう。

ヴェトナムの男性、ことに庶民たちは「穏やかながら一面に精悍さ」をもち、若い女性たちは「白や浅黄や淡紅の清楚なアオザイ服を翻す動作が軽やかで、温和な自然な態度を身につけており、冷たい表情も媚びの表情も露骨には

25) 中野孝次『自分らしく人間らしく』海竜社、1989 年、199 ページ。
26) 『私のなかのヴェトナム』119 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

示さない」[27] 芯の強さをももちあわせていた。そのヴェトナム女性たちとのかかわりが、敗戦後、思いがけぬかたちで小林に訪れた。中国軍の捕虜としてチョーガンで自活生活を強いられた日本軍は、ヴィンエンから運んだ穀類と自家栽培の野菜とでどうにか日々を凌いでいたが、その「兵隊に体をまかせて食物にありつこうとするヴェトナム人の女たちが、しだいに出没するようになった」のである。

> 大隊はこういう女たちの侵入にへきえきして、長いつえだけを持たせた巡回監視哨をこしらえたので、わたくしも何度かそれを命じられたが、…そのうち、この役目になれるにしたがい、わたくしはむしろ女たちの立場を守ってやらねばならなくなった。つまり、約束通りの金銭なり食物なりを彼女たちがその相手からちゃんと受取れるように、年かさの兵隊として口をきいてやるようになったのである。こうしてわたくしには、「知合い」の女が幾人かできることとなった。
>
> その年〔1945 年〕の 11 月下旬に、われわれはソンコイ・デルタのなかの村落に移って帰国の船を待つように命ぜられ、チョーガンを離れることになった。そのおり、鍋釜やアンペラの類までをいっさい、台地から川船の出る港まで運ぶのは大変なことだったし、またどうにも体裁のよくない行軍となったが、そこに数人の「知合い」の女たちが現れてしばらくわれわれといっしょに歩き、そのなかの一人はわたくしの荷物の一部を持ってくれたのであった。[28]

敗残兵としての日々のこのラスト・シーンで、小林は「落魄の思いと信昵(しんじつ)の感傷」[29] とを同時に味わい、また「このものがなしさと、せつなさと、なんともいえない底辺の思い」[30] とを噛みしめた。そうしてこの複雑で微妙な感

27) 『私のなかのヴェトナム』71 − 72 ページ。

28) 小林昇「地哭――わたくしのヴェトナム――」朝日『アジア レビュー』1973 年第 2 号。『帰還兵の散歩』未来社、1984 年に収録、42-43 ページ。

29) 『山までの街』97 ページ。

30) 『帰還兵の散歩』43 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

懐が、「その後のわたくしの学問と人生とにどこかで影響をあたえているような気がする」[31] とも述べている。それは既述のゲリラを処刑したさいの刺殺役と穴守役の二人の兵卒の胸に去来した思いとも通じているからであろう。さらに牛太郎のような珍妙な役回りを演じさせられたヴェトナム女性の「商売」が、日本軍の存在とかかわりのあるトンキンの飢饉によるものであり、その商売を介していまは捕虜の身である小林と女性たちとのあいだに目には見えない連帯の情が生まれたことも、小林に底辺の思いを噛みしめさせたであろう。

こうした交情とは別種のものとはいえ、日本軍の将校や下士官と小林のような兵とのあいだにも人間的な関係は稀にみられたのである。命中した魚雷で傾き始めた日永丸の甲板で、みずからは救命胴衣をつけずに、小林にそれを渡してくれたのは班長のK軍曹であり、その紐の足りない不完全な救命胴衣を小林の背中に臨機応変に結び合わせてくれたのも別の班のもう一人の軍曹であった。[32] こうした下士官の沈着な判断と責任感とが、海中の藻くずとなることから小林を救ったのである。先にも記したように、南方総軍の編成斑で＜あせらず、仲良く、休みなく＞の標語を書かせた少佐は、「専門学校の教師であったわたくしの前歴を知り、わたくしを観察したうえで、自分がただ事務上の先輩であるという態度でわたくしに接した。」[33] だがこのような将校と兵とのあいだの穏やかな人間的な関係は、軍隊の機構のなかでは「まったくまれなことであった」のである。

タムダオの山でトーチカ陣地造りを指揮した若い少尉と兵隊たちとの以下のような関係は、将校と兵との一般的関係を示す一つのエピソードであろう。この少尉は兵隊用語でいう小林の＜モノ＞とされていた。つまり「最後の戦闘の直前に、われわれが『心おきなく戦うために』処分すべき上官たちのリストのうち、わたくしにその処分が割当てられている男」[34] であった。こうした密約が実行に移される保証はなく、また小林もこの少尉に個人的な憎しみを抱い

31) 同、43 ページ。
32) 『私のなかのヴェトナム』45-47 ページ。
33) 同、79-80 ページ。
34) 同、114 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ていたわけではなかったが、兵隊たちのあいだで上官の「処分」リストが作成され、それぞれ処分にあたる兵が特定されていたことは、鬱積された感情の激しさを物語るものである。しかし日本軍の兵隊たちは敵と戦う前に、獅子身中の虫として自分たちの指揮官を最初の打倒目標に据えたことは、日本軍の組織としての欠陥を末期的なかたちであらわしたものといえよう。[35)]

兵隊たちの連帯はこのような暗いものだけでなかった。幾日も続いた行軍の疲れから、部隊の後尾から離れはじめた小林を、ハノイで現地召集された若い戦友の一人が引き返してきて、「小林さん、銃は俺が持つから」(傍点小林)といってくれたのである。[36)] また、ゲリラ討伐が長引くにつれ、次第に戦友のなかで小林一等兵の「社会科学的・ジャーナリズム的知識」にもとづいた戦局予想に信頼がうまれ、衛兵任務に就いているある夜には、ベッドから抜け出してきた戦友の一人に、敗戦の日を予想してくれるよう請われることがあった。こういうことが上官にもれれば懲罰ものであったであろうが、「こういう場合のすべてで、密告者を恐れる必要は私には少しもなかった」と小林はいう。小林の＜モノ＞である若い将校の「ここを墓場と思え」というデスペレートな叱咤にもかかわらず、「兵士はもう、古兵も一等兵も広大なアジアへの侵略の徒労と無意味とを、肌で十分に知っていた」からである。[37)]

5. 戦争体験が遺したもの

小林の戦争体験あるいは戦闘体験は彼に二つの教訓を遺した。一つは国家には根源的な権力悪が潜むということであり、もう一つはそのもとで生きなけれ

35) 「終戦の証書の拝読式」のあとの少尉の様子と小林を襲った熱い感情とについて次のように語られている。「宿舎の方から、もうわたくしの＜モノ＞でなくなった少尉が、自分の部屋に独占しているピアノをたどたどしく弾くのがきこえてきた。＜雲ニ聳ユル高千穂ノ…＞という、あの紀元節の歌を弾いているのであった。日暮れが遅い感じだった。わたくしはあれこれと思いふけっているうち、不意に、非情な風景として鎮もっているこの無住の街を一瞬赤く染めるようにして、カッと熱い感情が躰のなかから排き出されるのをおぼえた。」(『私のなかのヴェトナム』139-140 ページ) この一瞬の感情の奔流が小林の「8 月 15 日」である (拝読式の施行は 8 月 18 日、同書 26 ページ)。

36) 『山までの街』86 ページ。

37) 同、89、91 ページ。『帰還兵の散歩』70-71 ページも参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ばならない個人の生の厳しさである。縮めていえば、国家と個人あるいは権力と自由との関連という古くてあたらしい問題である。

兵として過ごし始めたサイゴンで小林に芽生えたのは、兵は一種の奴隷であり、しかも国家からなんどきでも軽々と見捨てられる存在であるという思いである。戦地にとどめおかれて「自分の人生から刻々に故国が遠ざかってゆくという感慨を味わうことには、どこか夢のような、いわばアナムネーシスの世界をさまようといったあぶなさがあった。わたくしはしばしば、自分が古典古代期の奴隷であるかのような錯覚に襲われた」[38]。こうした思いはヴェトナム各地を転戦するうちに次第に深まり、「いまのわたくしの身の上やおそらくわたくしの最後を知る人は日本にひとりもいないであろう。わたくしには三十年の過去があったけれども、ふしぎなことに、いまでは生きながらその過去と断ち切られてしまっていたのである。」(傍点竹本)[39] 兵が戦場に呼び出されたのは国家の命による。その兵が国家から過去を断ち切られ、生存の意味を与えられない「棄民」だとしたら、彼のいまの存在のリアリティは希薄なものになるであろう。そうした兵に残されたのは空想のなかで自己を確かめる自由だけであった。

> わたくしはまるで前世のようになった自分の過去のなかから、かえって現実のものとも思われない自分のいまの生のなかに、親しかった人びとをつぎつぎと呼び出しては対話をつづけていたのであった。ことに結婚して十カ月で別れてきた妻は、このような時間にはいつも長いあいだ、わたくしの想念のなかに呼び寄せられた。[40]

だが空想ははかない希望に飛躍しがちである。小林によれば、故国から隔絶されて自由を奪われた「奴隷」にとって、唯一生きのびる術は希望を抱かないことであった。なぜなら「兵隊にとっては、希望を持つということはしばし

38) 『帰還兵の散歩』50-51 ページ。
39) 『私のなかのヴェトナム』98 ページ。
40) 同、98 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ば、運命に堪えぬく力を弱めるものだ」[41] からである。希望を封印し空想の世界にのみ自己をひそかに解き放つというこの厳しい決意こそ、奴隷の生活に堪えさせ、棄民の運命を横にやり過ごすかすかな拠りどころだったのである。

その決意のなかで、既述のような暴力と性とにまつわるいくつかの体験を重ねる。そのなかからえられたのは、次の認識である。

> あらゆる権力的社会体制の奥に根源的な悪を認めないわけにはいかなかった。…これは論理の問題ではなくて倫理的体験であり、命がけの境遇のなかでわたくしの思想の胎内にはいり込んだものであったから、わたくしはこれを、密度の点でこれに匹敵する倫理的反体験を閲しないかぎりは、捨てることができないわけであったし、また事実としても捨てることができなかった。(傍点竹本)[42]

あらゆる「権力的社会体制」——その典型は国家体制——に「根源的な悪」が内在する、これが戦地での「倫理的体験」から身に固着させ中心的な思想である。もっとも「旧制高校時代に深刻なドストエフスキー経験」[43] もち、「ドストエフスキーが、神と悪魔との永遠の対立を描いたことからも既に深い感銘を受け、そのためにプロレタリア文学にむしろ反発して、文学の本質はあるゆる体制への批判にあると信じていた」[44] 小林であるから、権力のさらに奥に人

41) 同、61 ページ。

42) 『帰還兵の散歩』59-60 ページ。

43) 小林昇「『国富論』の学史的位置の相対化——諸文献の発掘とともに——」『経済学史学会年報』第 38 号、2001 年 11 月。『経済学史春秋』未来社、2001 年に再録、同書、195 ページ。なお、小林がヴェトナムで読みえた本は『枕草子』とアンナ夫人の『夫ドストエフスキーの回想』の 2 冊であった。また帰国後、最初に手にした本が『死の家の記録』であり、その再読によって、「ツァー時代のシベリアの徒刑監獄の生活よりも、敗戦直前の日本軍隊の内務班の生活や戦闘訓練などが、息つく隙がないという意味で過酷だった」と了解したのである。(「国民経済形成の問題に寄せて——スミス、リスト、ソルジェニツィン——」『どう考えるか——歴史の破綻=文化・経済・国家——』二玄社、1975 年。『帰還兵の散歩』に再録、同書、12, 24-26 ページ。)

44) 『山までの街』169 ページ。小林はまた「ドストエフスキーの『悪霊』や『大審問官』をつねに『資本論』の試金石とすることが、わたくしの自然の道であった」とも述べている。「内田義彦著『作品としての社会科学』(1981 年) を読む」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』16 号、1982 年 3 月。『小林昇経済学史著作集』XI 巻、1989 年、390 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

間の魂や死の問題つまり神の問題をとらえようとする素地があったであろう。戦地での倫理的体験は、その問題を権力の根源的な悪の認識と結びつけて体に刻みこませ、そこから「いっさいの権力に対する不信」(傍点小林)[45] という信念を導き出されたのである。ここに戦後の小林の行為規範の拠点がすえられる。大小さまざまの政治的なあるいは社会的な権力関係において、一方で指揮・動員されるみじめな「兵隊」(奴隷！) 的な地位に再びたたされることは願い下げながら、他方で大衆を煽って動員し指揮する「進歩的文化人という滑稽でひ弱な人種に属したりすることは、他方で新しい兵隊の大群を前提としていなければ考えられないはずのことだと、…確信されたから」[46] そうした進路をも断とうとしたのである。

人はいっさいの権力関係から無縁な地点に立ちうるかどうか、この深刻な問題はのちに小林自身のこととして言及するとして、小林は指揮する者と指揮される者との関係の外にみずからの拠点と生き方を築こうとしたのである。それは戦争体験が遺したもう一つの教訓、すなわち平穏な日常生活を大切に守るという教訓とふかく関連している。

> 果ても知れない戦旅の日々は、平凡にくりかえされる日常生活の人間らしさと、そのあいだに与えられる私的なくつろぎの宝石のような貴重さとをわたくしに教えた。…そういう小市民的な時間の貴重さは、日常性をまったく欠いていっさいの私的時間の所有がゆるされない兵隊としての、つまりラーゲリの一囚人として、わたくしが大きな喪失感のなかで発見したものであった。…ともあれ、わたくしはこういう〔兵隊としての〕非日常的な生活のなかで、…人間の理性の結晶だとすべき、日常の平穏な生活の意味するものの深さを知った。[47]

「平凡にくりかえされる日常生活の人間らしさ」は、「ラーゲリの一囚人」と

45) 『帰還兵の散歩』25 ページ。
46) 同、60 ページ。
47) 同、62 − 63 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いう境遇のなかで深く感得されたものであって、それは「小市民的な時間」を掌中の珠とするものではあっても、小市民的生活への安住を意味するものではなかった。なぜなら「もはや旅には身を委ねまいという生活上の根本的態度」[48] がそれに伴っていたからである。小林のいう旅とは、「“身体でわかること（身体に刻み込む）こと”、すなわちみずからも傷つき、またその旅程で自己を革新するような位置、弾のあたる場所で相手とかかわる」[49] ような旅のことである。したがって「ヴェトナムで一期（いちご）の旅をしつくした」[50] というのはそういう旅のことである。しかもそれは国家から強いられた旅であった。ほんらい旅には何かをひそかに捨てるという決意がなにほどか伴うものであるが、この自発的な断念によって自由を回復するという旅がはらむ契機は、小林のばあい、皮肉なことに旅そのものを断念することのなかにあったのである。さらに心理的な面からみれば、戦場で受けた弾片（体験）の数々を呑み込んだ小林の体は、もはや苛酷な旅に耐えるほどの体力を失わせ、小市民的な平穏な時間の流れに癒しを求めたともいえるし、あるいは流竄の意識がアジールを求めさせたともいえる。だがアジールであるかぎり、与えられる時間はかりに平穏だとしても世間のそれと同質のものであるはずはなかった。すなわち、そこで研究にあてられた時間は、河井寛次郎が朝鮮人の藁細工職人に見た、「針金のような時間――断続することなく同じ太さでどこまでも続いてたるまない時間」[51] であり、卑俗のうちに浪費される時間ではない。リズムとして身につけた緊張した時間である。

ところで小林は、「帰還後 40 年近くもわたくしに労作の継続を可能にさせた」（傍点小林）ものが一期の旅が残した「かなり深い疲労感」であったといっている。[52] あるいは、「戦争の経験が『虚無』の色合いでわたくしの肉体と精神とを染め上げ」、この「ある種のニヒリズムが持続と生産との根源」[53] になっ

48) 同、64 ページ。
49) 新原道信「旅」『事典 哲学の木』講談社、2002 年、699 ページ。
50) 『帰還兵の散歩』64 ページ。
51) 河井寛次郎『手で考え足で思う』文化出版局、1981 年、140 ページ。
52) 『帰還兵の散歩』64 ページ。
53) 小林昇「わたくしの経済学史研究――一つの回顧――」大東文化大学『経済論集』第 50 号、1990 年 4 月、『経済学史春秋』未来社、2001 年収録、152 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たともいっている。なぜ疲労感や虚無が生産的な仕事の継続の源になりうるのであろうか。小林自身もその理由を明確に説明しがたいと述べているが、ヒントは俳人・石田波郷に寄せた次の文にあるように思われる。

> 人は誰でも、生産的であるかぎりは生きなくてはならないから、またそれを義務の命令として身に感じるから、かすかに余力のあるあいだは生きようと努めるのである。作者〔石田波郷〕もまた同様であった。そうして彼のばあいには、生きるかぎりは句作の境涯も深められなくてはならないというふうになってゆくのである。[54]

「帰還後を余生と観ずる」小林にとっても、「かすかに余力のあるあいだは生きよう」という内面の促しと疲労感との「相剋」がかえって生命力を呼び覚まし、研究を絶えず深め進めさせたということであろう。[55] だが、その内面の促しは個人の生命力だけに由るのではない。たとえ一人の帰還兵の疲労感や虚無が癒やされることがないとしても、病んでいる人類もいつかは癒やされるという望みにかけるからこそ、小林個人の内発的生命力は普遍的なものにつながり促されるのである。それゆえ「人類の永生ないし長生という確信こそ、つねに頽(くず)れようとする個人の生を支える唯一の前提なのである」[56] といえるのである。

さて、戦争体験が遺した平穏な日常生活にたいする愛惜の念にかんして二つのことを指摘しておきたい。一つはそれが、戦争体験のもう一つの遺産すなわち「生涯にわたって下から上を見る――しかし、或る種の余裕をもって――という視座」[57] と対をなすものであり、またその視座を担保するものであったということである。いいかえれば、小林の帰還後の研究生活は、庶民の生活者としての日常（底辺）の視点にアンカーを降ろすことで、小林の生活にも日常

54) 小林昇「癒えむため」『ビジネス』第 14 巻 10 号、1970 年 10 月。『帰還兵の散歩』未来社、1984 年収録（「癒えんため」に改題）、10 ページ。
55) 『山までの街』115 ページ。
56) 『帰還兵の散歩』10 － 11 ページ。
57) 同、60 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

性の意味が付与され続けたのである。もう一つは、平穏な日常生活への敬愛も庶民的な目線も帰還後のものではないということである。非日常性の極にある戦闘のなかにあっても、生活者としての姿勢を最小限でも守り抜こうとしたことは、すでに述べたとおりである。慰安婦に自分とおなじ奴隷の境遇を感じ取り、そこからつまり「下から上を見る」ことでみずからが身をおいている戦争の本質を見て取ったのである。一つだけエピソードを付け加える。ヴェトナムが雨期に入った 1945 年 6 月ごろ、ゲリラの侵入に備えて任務についたその合間に、孤屋で「手製の小さい、薄いノートに、鉛筆で、進めるべきリスト研究の段取りを書きつけていた」[58] という。このことも戦旅のなかでの確かな日常意識の発露である。

小林の生活態度は戦時中も戦後も生活の日常性を尊重することにあり、しかもその日常性は大衆とのつながりを意識しつつも、あくまでも独りのものであった。それゆえ他者とのベタの関係は望まれていない。漱石は自分の個人主義について、「朋党を結び、団体を作って、権力や金力のために盲動しない」ということ、さらには「我は我の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げない」ことなのだといっている。したがって「ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。其所が淋しいのです。」(傍点竹本)[59] とその覚悟のほども述べている。小林の生活態度もまたそうした淋しさを免れえないものである。小林もある種の個人主義をかかえているといえるであろう。それは日本人が西欧的価値にもとづいた個人主義を喧伝するときの華麗な理念の展開はないものの――むしろそれを厭い――、そのことがかえってそうした理念の高踏性やリアリティの希薄さ・ひ弱さ、それゆえまた責任の不在を免れさせている。だが、漱石の言に添っていえば、我が道をいくことそれ自体が他人の行くべき道を妨げることがないのかどうか、個人主義の自由は排他性という危うさをも抱えている。

58) 『山までの街』89 ページ。

59) 夏目漱石「私の個人主義」『輔仁会雑誌』1915 年 3 月 22 日、三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫、1986 年、130 − 131 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

6. 亡びない国家

小林は既述のように、国家に根源的な悪が潜むことを確認した。そのことはただちに国家の安楽死をも求めることにもなったのであろうか。たしかに、「およそ権力と偏見との拠りどころである国家というものをどうすれば死滅させうるであろうか。」[60] という述懐がある。これは帰還後30年を経て吐露されたものであるが、この願望は終戦前後のものでもあるのだろうか。国家を権力と偏見との拠りどころとする認識は戦地での倫理的体験ですでに確信されたものであるから、そうした願望はこの頃に萌したと推定できるかも知れない。以下に三つの例をあげて、このことを検討してみたい。

第1。ドイツ降伏の情報は北ヴェトナムに駐留する小林の耳にも届いた。そのころハノイで現地召集されたTと交わした次のような会話がある。

〔小林〕とうとうここまで来たな。ドイツ人はいまどうしていることか。
〔T〕あんたのいいたい予想はわかる。しかし、負ければお互い助からんのだろう。それより、俺は日本がほろんでも生き残ろうとは決して思わないな。
〔小林〕…いまの世の中では、戦争が負けたって国が亡びるというわけのものではないよ。ドイツだってやがては復興してくるはずだ。[61]

敗戦=亡国=死といちずに考えるTにたいして、小林は「近代では敗戦がそのまま敗戦国の消滅やその国民の奴隷化に終わるものではない」[62] として、「戦争が終わればいままでとはちがって、自分の判断や才覚も役に立つ」と、敗戦後も生きぬくことをTに説いたのである。国に自己を同一化し、国の戦いに勝つことに自己の生の意味を自得するTの純な思い入れは、政府や軍の指導者たちが、必勝や名誉の死やあるいは「生きて虜囚の辱め」を受けないことはたたき込んでも、戦争では負けることがあること、負けたあと生きてどのよ

60) 『帰還兵の散歩』23ページ。
61) 『私のなかのヴェトナム』117ページ。
62) 『山までの街』88ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

うに身を処するかを教えてこなかったことの一つの帰結である。実際に、敗ければ「日本という国は終わり」と信じて、故国に帰ることを選ばす、北ヴェトナムに留まった兵士もいたのである。[63] だが、甚大な災禍とおびただしい死とさまざまな不幸とをもたらしながらも戦争は終息する。そこから人びとの生活がまた始まる。他方で国は、その体内に悪を抱えながらも、そうした人びとの活動に支えられて一個人の生よりも長い時を刻むものなのである。個人の善良な生は、国家との関係において、この逆説を引き受ける強さが求められる。

第 2。これも敗戦が間近に控えていたころ、小林は濃い霧が立つ晩にフランス軍の捕虜たちの監視にあたっていた。

> こういう霧のなかを冷えて立ちつくしながら、わたくしは自分の躰がいまよりももっと温かに思われたずっと若いころの記憶を呼びおこして、むだになった青春を顧みていたが、いつのまにか、明治という上り坂の時代に生きた人たちのことを思いうかべているのであった。その明治は、すでにかなり遠さを保ちながらわたくしの前に眺めわたされた。…深い虚脱のなかから父祖の世代が見られた。「遠つ明治、遠つ明治」、わたくしは口のなかでそうくりかえしていた。[64]

敗戦に行き着きつつある昭和の国家、その衰運にたいする思い（批判？）は、若々しく昇り調子であった明治国家を想起すれば、失われた青春の哀しみと重ね合わされてなお深まるのだが、それでもわが身を「遠つ明治」の父祖の世代と同化することで、虚脱からの再生のかすかな希望を見いだせたのである。

第 3。小林は帰還の第一歩を印した浦賀港の突堤で、仮設の板塀に各都市の地図が順序よく貼られているのを見つけた。地図には帰還者の便宜を考えて、空爆で焼かれた区域が赤く印されていた。そうした配慮に小林は、戦後の再建

63) 青沼陽一郎『帰還せず――残留日本兵六〇年目の証言――』新潮社、2006 年、311 ページ。小林も敗戦から帰国を待つあいだに、ヴェトナムの女性と脱走していく兵を目撃した（『私のなかのヴェトナム』154 ページ）。これが恋の逃避行であったのか、あるいはそれ以上の複雑な事情が逃亡兵にあったのかはわからない。

64) 『私のなかのヴェトナム』128 － 129 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を担うべき人びとが連帯感を失わずに、つまり国民として生きていることを感じ取り、安堵したのである。

> 私はその仮設の塀の前を行きつ戻りつして、日本国民がまだ一体として生きていて、互いに呼び合っていることと、この故国のいわば精神のインフラストラクチュアがまずまずしっかりと残っていることとを知った。それは酸鼻と浪費と屈辱とに終わった、戦争という長い叙事詩の、最後の行を響かせる韻律であった。[65)]

上の三つの例を考え合わせると、「およそ権力と偏見との拠りどころである国家というものをどうすれば死滅させうるであろうか」という問いが、かりに終戦前後の時期に発せられたとしたら、それは反語的表現であったとみるべきであろう。事実のちに小林は、日本が復興できた究極的な要因は、「近代国家を形成できる国民…が〔敗戦後も〕残っていてやり直したこと」にあったといっている。[66)] したがって、小林は国家の根源的な悪を戦地でその体に刻みつつも、国家を死滅させるという思想——それがアナーキズムのものであれ、マルキシズムのものであれ——をもつことはなかったのである。

7. 戦後の出発

1975年4月の南ヴェトナム解放民族戦線のサイゴンへの無血入城によってヴェトナム戦争は終結し、それを受けて翌76年6月には正式にヴェトナム社会主義共和国の樹立が宣言された。1965年のアメリカ軍の北爆開始から数えても10年余、1945年のヴェトミンとフランス軍との第1次ヴェトナム戦争からすれば30年余のことである。この年はまたアダム・スミスの『国富論』が出版されてからちょうど200年目にあたり、日本でも世界でもそれを記念する行事や本の出版があいついだ。いまでは考えられないことだが（？）、『週刊東

65) 『山までの街』104ページ。

66) 小林昇「私の学問形成：戦中」住谷一彦・和田強編『歴史への視線——大塚史学とその時代——』日本経済評論社、1998年。前掲『経済学史春秋』再録、166ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

洋経済』も『国富論』特集の臨時増刊号を発行し、そのなかに内田義彦、小林昇、水田洋の＜特別鼎談 私たちのスミス研究＞をおさめた。三人はそれぞれに異なる戦争体験をもったのだが、いまは内田と水田のそれに論及する余裕はない。かれらはその体験を踏まえてそれぞれの仕方で戦後に歩みだそうとしていた。その当時を三人三様に回顧している。まず内田から。

> **内田**　ぼくらの世代は…戦争とともに思想はいったん崩壊した。これは政治的事実であるとともに、ぼくらの内面的な事実でもあった。だから、もう一度思想を作り直さなければいけないとわかっても、〔その思想が〕他人に号令をかけうるという意味での客観的な意味をもつというほかに、その前に少なくともそれとからんで、ぼく自身、何をよりどころとして生きるかという問題のほうが強かった。(傍点内田)[67]

戦争によって政治的にも内面的にも思想の崩壊という経験をしたために、自分の思想的再建つまりは主体の再形成ということを喫緊の課題として抱え込んだ、というのである。この思想の崩壊が「戦争とともに」おこったとされ、敗戦によるものではないことに注意されてよい。「戦争とともに」には敗戦も含まれると解釈しうるが、それでは敗戦から 3 か月足らずで内田が「新聞と民主主義」の題で、戦後第一声を発したことと辻褄があわない。[68] 内田はこの論説で、新聞が真に「民衆の立場」に立って、天皇制批判や財閥の責任等々について自由に論陣をはることを訴えている。その論調には思想の崩壊をうかがわせるような逡巡や曖昧さがまったく感じられない。やはり崩壊は戦時中のことだとするのが自然である。内田は 1931 年に甲南高等学校、34 年に東京帝国大学にそれぞれ入学し、39 年に東大卒業、翌 40 年に東亜研究所に勤務し、44 年

67)　《特別鼎談》「私たちのスミス研究」『週刊東洋経済』臨時増刊、1976 年 2 月 13 日、115 ページ。

68)　内田義彦「新聞と民主主義」『大学新聞』第 44 号、1945 年 11 月 11 日、『内田義彦著作集』第 10 巻、岩波書店、1989 年収録、20 － 23 ページ。戦時中の思想の崩壊→思想の作り直しの模索過程と敗戦直後からの民主主義のイデオローグとしての登場とのあいだの思想的な連関は、内田における不明なもののひとつである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

12月には治安維持法違反容疑で数か月拘留されたあと敗戦を内地で迎えているが、高校時代にマルクス主義に目ざめ、大学時代にはひとかどのマルクスの理論通と自認していた。卒業後には技術者の運動と関連する技術論の研究会にも参加していた。その内田の思想が戦争とともに崩壊したのである。だが戦争の何によるのか、またどのように崩壊したのか、つまびらかにされていない。一般的にみれば、戦争の進行とともに強まったマルクス主義や自由主義にたいする弾圧——もしかすると何らかの個人的な出来事がそれに加わったいるのかもしれない——がそのきっかけになったと推測される。それによって内田の思想が政治的にも内面的にも崩壊し、その後は「生きる」思想的拠点を求めて内面的苦闘が続いたのであろう。「ぼくは…戦争中はスミス研究家はもとより、思想史研究家になろうとも思っていなかった。ただもう模索に明けくれて乱読していましたね。」(傍点内田)[69] という発言が、そのことを裏書きしている。こうした発言は、内田にも一種の「転向」体験が戦争中にあったという推測を可能にする。もっとも内田は戦時中も広い意味でのマルクス主義を捨てたわけはないので、転向というのは適切でないと思われるかもしれないが、「思想を作り直す」という表現が、思想の崩壊→思想の転回・再建の模索過程を一語で暗示しており、これも転向のひとつの形といえるであろう。内田は、戦後、さまざまな表現を使って主体性の問題を説き続けるが、その問題意識の震源はこの戦時中の「崩壊」問題にあったと思われる。

さて、内田より6歳年下で「崩壊した後にノコノコ出て来た世代」と自己規定する水田は、1939年に東京商科大学（現・一橋大学）本科に入学し、41年12月に繰り上で卒業、42年に内田と同じ東亜研究所に入所する。崩壊後の世代の水田には、「マルクスだから正しい」といういい方にはもはや説得力を感じられずに、「マルクスをつつみ込んだ、もう一つの外側の近代思想の全体をつかまえてみないと安心できな」くなっていて、ルネサンス、自然法の研究に手を染め始める。「それが開戦直前の昭和13年〔1938年〕から15年〔1940年〕ごろ」、つまり東京商科大学の予科末期から本科卒業頃までの学生時代の

69) 前掲「私たちのスミス研究」114ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ことである。その水田も「崩壊のあとでどうするかという模索は、〔内田と〕同じような感じだった」といっている。[70)]

水田は東亜研究所に入所した年の末に陸軍軍属としてジャワへ派遣される。「日本にいても召集されて犬死にとあっては、軍属で逃げたほうがとくだと判断した」[71)]からだという。これが本音なのかどうか分かりかねるが、水田は小林から遅れること 2 か月、1946 年 6 月に帰国をし、その年の秋から特別研究生として母校に戻った。そのときには、「かつての最左翼が、不在中に舞台が移動したために、帰ってみると最右翼になってしまったよう」[72)]に感じられたいうから、水田のばあい、1946 年から 47 年頃の日本の「革命的」な政治的・思想的気運に戸惑いを感じ、なんらかの「模索」(政治的？) はあったものの、戦時中の内田のような煩悶は戦後にも訪れなかったようである。

それに対して小林は二人とはニュアンスを異にする発言をしている。

> ぼくはお二人〔内田義彦、水田洋〕と違って、戦争から帰ってきて自分を立て直そうという考えはぜんぜんなかった。助かって帰ってきただけのことという思いが強く、すべてがゼロで、しかもゼロで終わるしかないという感じだった。自分を築くよりも、対象を築かねばならなかったともいえる。[73)]

戦争によっても敗戦によっても「崩壊感覚」を経験しなかったこと、したがって「自分を立て直す」という考えをもちようがなかったこと、そのかわりに「イデオロギーがハッキリ形成されないうちに、一番下っ端の兵隊として痛めつけられた体験をもつ者にとっては、思想をイデオロギーとして把握する、つまりイデオロギーに従って構築された世界観というものはいわば肉体が受け

---

70) 同、115-116 ページ。

71) 水田洋『ある精神の軌跡』東洋経済新報社、1978 年。再刊、社会思想社、1985 年、156-157 ページ。

72) 同、211 ページ。

73) 前掲「私たちのスミス研究」121 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

つけなく」[74] なってしまっていた。そこに帰還後の生をゼロからゼロへと向かう、あるいは「死から出て死に」[75] 向かうそれととらえる虚無的な生の意識が生まれる。したがって自分の思想の（再）形成ということは論外のことであった。むしろ虚無に耐えうる生活の質を形成すること、すなわち研究対象を築いていくことに主眼がおかれた。それを後押ししたのが丸山眞男の論文「超国家主義の論理と真理」（『世界』1946 年 5 月号）である。

小林はヴェトナムで「日本の軍隊というものを見きわめた」という思いが深かったために、復員直後には、「支配機構が官僚制と暴力とを結合させる必然性や、日本絶対主義とスターリン体制との双方に通底するものの存在などについて…いつかその考えを公表するつもりでいた。」ところがそのとき丸山の論文「超国家主義の論理と心理」に接し、「わたくしはこの方面の仕事の予定はもうまったく無用に帰したことを、筆者〔丸山〕への敬意を以ってはっきりと悟り、ここから一種の解放感を得て、以後はすべての学問的関心を経済学史という専門に集中することができた」のである。[76] 既述のように、小林がヴェトナムでの戦闘体験を語りはじめるのはヴェトナム戦争の最中のことだが、帰還直後すなわち 1946 年 4 月ごろには自己の戦闘体験によって現代史にたいする歴史的批判、あるいは踏み込んでいえば一種の政治論戦をも挑もうというとしていたことに注意していいだろう。しかし丸山論文の登場に「解放感」をえてその試みを自発的に放棄し、小林の「政治の季節」は幻に終わった。以後は経済学史という地味な領域の開拓にエネルギーを集中することになる。ここで留意していいことは、小林が丸山論文に共感を覚え、それによってある種のカタルシスを得たことある。戦争でまとった虚無的な意識のなかで「対象を築く」ことは、小林にとっても容易なことでなく、こうした触媒を必要としたのである。

小林の戦後への踏みだし方のもう一つの特徴は、生還時の日本を席巻していた思想潮流たとえば民主主義、自由、平等、革命などの理念に寄りかかって、

---

74) 同、114 ページ。

75) 小林昇「内田義彦君 人と学問」『内田義彦著作集』第 10 巻別冊『私の中の内田義彦』1989 年 11 月、20 ページ。

76) 小林昇「先生」『未来』361 号〔追悼・丸山眞男〕、1996 年 10 月、4 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

大局的見地からあるいは上から大衆に語りかける知識人の姿勢をとらなかったことにある。それは戦争体験で、大きな枠組みによって説かれるイデオロギーの虚構性やそれを遂行しようとする支配機構の無責任性をわが身で体得したからである。さらにすでに述べたことだが、戦争で負った傷も小林を抑制させていた。「わたくしは帰還以来、罪の意識を負って生きています。このことから…わたくしは知識人として大衆を指導するというような意識が持ちにくいのです。」[77] といっているのがそれである。その後もこの姿勢を守ろうとした。「私は社会科学の一研究者としてそのご六十年も生きつづけたあいだ、何によらずイデオロギーというものを（とくにマルクス・イデオロギーを)、他者に、とくに生徒・学生諸君に説くことが絶えてなかった」[78] といっている。

こうした身の処し方は小林が学問上で敬意を払い影響もうけた大塚久雄のそれとは異なる。大塚は、戦後日本のあたらしい課題とされた「民主主義の虎を画いてこれを猫に化せしめないためには、なによりもまず…人間的主体の近代化・民主化が、すなわち民衆をば近代的・民主的な人間類型に教育…することがなによりもまず必要なことになる。」[79] と説き、民主主義の定着には民衆を民主主義的に教育する（教育し直す）ことが必要であり、その役割は知識人の肩にかかっているとした。同じことを内田義彦も別様に述べている。「自立

77) 『帰還兵の散歩』37 ページ。

78) 『山までの街』88 ページ。

79) 大塚久雄『近代化の人間的基礎』白日書院、1948 年、『大塚久雄著作集』第 8 巻、1969 年、170 ページ。

ところで戦争末期の大塚は、戦時日本を西欧近代の「古い資本主義的“自由”経済を超克しつつ、あたらしい“経済統制”（“計画経済”）が生成」しつつある世界史的段階にある国家として位置づけ、その「世界史的使命」を達成するために、「“営利”を介せずに、直接的に、“全体”による“統制”（“計画”）のうちに参入し、それ自体で国家性または社会性を帯びうる」ような「“目的”（方法的）合理性を十分に伴ったところの強力な“自発性”によって支えられた」あたらしい経済倫理的主体の確立が急務だと説いていた。このように大塚は、戦時中も戦後も、自発的倫理としての合理性の重要性を説いていた。それは戦時の超近代的主体にも戦後の近代的主体にも適合可能なものであった。大塚久雄「最高度の“自発性”の発揚――経済倫理としての生産責任について――」『大学新聞』1944 年 7 月 11 日号、「経済倫理の問題的視点――工業力拡充の要請にふれて――」『帝国大学新聞』1944 年 5 月 1 日号、『大塚久雄著作集』第 8 巻、341, 343, 352 ページ。なお中野敏男『大塚久雄と丸山眞男――動員、主体、戦争責任――』青土社、2001 年、69-70 ページも参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

した個々人のいないところでは社会は国家に吸収される。社会科学の論理を身につけることなしに、どうして自立した諸個人になりえようか。しかしまた逆に、自立した存在たることへの意欲なしに、どうして社会科学の論理が身につこうか。」[80] 大塚の「近代的・民主的人間類型」と内田の「自立した個々人」とは実質において同じものであり、「教育する」、「社会科学の論理を身につける」うえでの知識人の役割がともに強調される。こうした考え方は社会科学者に特有なものではなく、中野重治のような文学者も、文学者を国民の「教師」であると自己規定したうえで、国民を文学で教育することで日本を「文化国家」に生まれ変わらせる必要性を次のように高唱したのである。

> われゝ日本人は連合国の力で解放された。民主主義への道はわれゝに外から興へられた。…文明と平和とのおこぼれに満足して、世界文明の作り手の一人にいつの日かならうといま決意せぬとすれば、日本民族は劣等民族であって亡ぶ民族である。日本の文学者はこのことを国民に教へねばならぬ。[81]

小林が忌避したのはこうした大衆を指導、教育、鍛錬するという啓蒙的姿勢である。いいかえれば、研究者や文学者がみずからを知識人とみなして大衆と隔絶する一種のエリート意識――当人が自覚しているか否かは別にして――をもつことに懐疑の念を示したのである。

こうした戦後の出発点における小林の姿勢は、この項で登場する人々のなかでも特異なものであった。帰還を果たしたときの小林は 29 歳、終戦時の内田、丸山はそれぞれ 32 歳と 31 歳、一番若い水田が帰還したときの年齢は 26 歳、そして最年長の大塚は 38 歳。大塚だけは少し年が離れているが、かれらはほぼ同世代といってよい。ときに民主主義や平和の冠のついた革命が謳われ、広

80) 内田義彦「考えるということの姿勢」『毎日新聞』1970 年 1 月 12 日、13 日、14 日『生きること、学ぶこと〔新版〕』藤原書店、2004 年、35-36 ページ。

81) 中野重治「文学者の国民としての立場」『新生』第 2 巻第 2 号、1946 年 2 月、16 ページ（同『日本文学の諸問題』新生社、1946 年に収録、11 ページ）。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

範な民主人民戦線の結成が説かれていた。内田、丸山、大塚が加わった「青年文化会議」は、その設立宣言のなかで「一切の旧き自由主義者との訣別を宣し、茲に新たなる民主主義建設の軌道を拓かんとする。この為…若き民衆に呼びかけ、啓蒙活動に邁進することを誓約す」[82] と高らかに謳っている。ここには 40 代以上の知識人に対するある種のルサンチマンと高揚した社会的使命感とが吐露されている。小林の心情と構えはこうしたものから遠かった。また中野重治との「政治と文学」論争に加わった荒正人もこのとき 33 歳であったが、かれも 40 代以上の知識人たちが唱えたヒューマニズム（抽象的真理とユートピアの合体）の欺瞞性から目ざめ、戦後の飢えに苦しむ人々の「二合一勺の配給をせめて五勺にしてもらひ、やがて三合にしてもらひたいといふ、いぢましいまでに即現実的な、エゴイスティックな日常の欲求」を認めることが大事だとした。そのうえで、その「エゴイズムを拡充した高次のヒューマニズム」を模索することが、戦争で本来の青春を奪われた 30 代の「第 2 の青春」の課題なのだとした。[83] 既述の通り、小林も戦場で人間のエゴイズムをじゅうぶんに見た。他方で、エゴイズムを抱えた兵や下士官のヒューマニティの発露に助けられもした。とはいえ、たとえ「高次」のものであろうともヒューマニズムという観念を世代の集団的目標とすることは、若くして国家的イデオロギーを押しつけられ、その虚妄を戦場で知った小林には、新たな幻想を振りまくものであり、それゆえに大小の犠牲をふたたび強いるものと写ったであろう。また小林は間近にせまったみずからの 30 代に、第 2 の青春という解放感や向日的気分で期待をかけてもいなかった。これから始まろうとする戦後の生活も戦中とおなじように荒廃（ゼロからゼロへ）と観ずるところから、戦争体験を内面の重石としながら空華を追わず、孤独な知的営為を志向したのである。すなわち、「世間的知名度の高さは研究生活の密度と反比例せざるをえないという認識は、わたくしの生活的信条にかかわることであった。そうして、帰還兵にあたえられた後半生に自己の信条をできるだけ謙虚に守ろう」[84] というところ

82) 『大学新聞』1946 年 2 月 11 日号

83) 荒正人「第二の青春」『近代文学』第 2 号、1946 年 2 月、同『第二の青春・負け犬』冨山房百科文庫、1978 年、20-25 ページ。

84) 『経済学史春秋』150 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

から、戦後の第一歩が踏み出されたのである。そのこともあってか、その後の小林を「古典に沈潜している篤実な人」[85] とする評のように、どこか敬して遠ざくような、つまり古典への沈潜が篤実なこととはみなされても、沈潜の成果（学問的業績）がその土台をなしている思想にまで降りて理解されることは少なかった。

8. 死の自由と未遂の死——官僚制的社会における自由——

大塚久雄、丸山眞男、内田義彦といった人々の考え方や発言は、後に「戦後啓蒙」の名でくくられるようになった。[86] その適否は別として、かれらは戦時体制（1931 年頃から 45 年まで）と戦後体制[87] とをその断絶面や対立面に比較的アクセントをおいて捉える傾向がある。いうまでもなくこれは一般的な特徴であって、人によってそのアクセントの強弱はあり、また論点によっては両体制の連続面に注意を払う場合もあるから、この傾向あるいは特徴の機械的な理解には注意を要するが、あえて図式的にいえば、ファシズム対民主主義、専制（暴力）対自由、盲従的皇国民対自立的市民といった対抗的な枠組みが採用される。小林は先にも見たように大塚や内田の大衆に対する広い意味での教育的・鍛練的な姿勢——これも啓蒙の一面である——とは距離をおいた地点に立っていたから、こうした枠組みで語ることはない。むしろ小林は、「指導者

85) 鷺［伊東光晴］「かつて日本軍が対決したもの——小林昇『私のなかのヴェトナム』——」『週刊朝日』1968 年 11 月 29 日号、108 ページ。

86) 杉山光信の『戦後啓蒙と社会科学の思想』（新曜社、1983 年）は、書名に戦後啓蒙の名をのせた初めての書だと思われるが、むしろ本文では丸山眞男、大塚久雄、内田義彦を「市民社会派の社会科学」と呼んでいる。

87) 戦時体制も戦後体制も丁寧な議論を要する概念である。たとえば戦後体制と一口にいっても、1952 年 4 月までの占領体制とそれ以後とのあいだに分水嶺があるし、また経済的に見ても 1950 年代後半からの高度成長期と 1971 年のいわゆるニクソン・ショックおよび 1973 年のオイル・ショック以後の時期とでは同じ時代としては扱えない。戦後啓蒙といわれる論者たちの活動が活発でその影響力も大きかったのは敗戦後から高度成長期の初期までである。これは上の政治的、経済的区分とは相対的に独立してとらえるべきものである。ここでは時代思潮あるいはイデオロギーの観点からみているので、暫定的にせいぜい 1960 年代の半ばごろまでを戦後体制とするが、このことは本稿で論及したような諸問題が 1960 年代で終焉したということを意味しない。戦時体制については広義にいわゆる 15 年戦争の期間をさすものとしてしておく。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

と大衆」という権力関係の内実が、とりわけ官僚制の支配という点で、戦後も大きな変化がないことに注目する。いいかえれば、「大衆の自由」あるいは「自由な国民」というお題目の幻想性に注意を促したのである。

まず戦時官僚制のもとにおける小林の手痛い経験を聞こう。小林がサイゴンの南方総軍でM大佐の転任の挨拶を聞き軍=官僚機構への絶望を深くしたことは既に述べた。そのことがあって「総軍を離れて第一戦に出たい」という願望が萌した丁度その頃、アメリカの攻勢が一段と強まってきた。そのことが小林の願望を行動へと駆り立てることになった。いま「ヴェトナムにアメリカ軍が上陸すれば、総軍はマニラでしたように、また将校たちだけが兵隊を捨ててどこへか逃避し、事務用員として小銃しか持たされていない総軍所属の兵隊たちには、四散して死ぬ以外の途がないであろう」[88] と確信されたからである。「将校たちが兵を捨てる」という予感は、南方総軍のマニラからサイゴンへの退却という事実だけに根拠があるのではない。小林が九死に一生を得た輸送船の沈没にさいして真っ先に離船したのが中隊長の将校であったことも、その予感を裏づけていた。[89] 先に述べた、兵は国家の棄民となりうるという観念は、兵は戦闘指揮者よって戦場へ遺棄されるという確信によってさらに現実的なものとなったのである。高級参謀に見捨てられた兵は赤子の手を捻るように米軍に殺されるであろう。それは敵と闘ったうえでの戦死ではなく、味方の参謀による殺戮にほかならない。この犬死の悲憤こそが第一線の部隊で戦死を遂げようという選択をさせたのである。さらに「いちおうちゃんとした武器を持って戦いながら死ぬことの方が、まだしも人間的ではなかろうか」[90] という戦闘死の美学（？）と、死の自由（裏返せば戦場でのぎりぎりの生の自由）の奪還、すなわち「せめて死にかたを自分で選べる道を求めよう」[91] という決意とが官僚機構からの脱出に駆り立てたのである。

最前線で戦闘死を遂げたいというこの願望は「若い私の見栄のようなもの」[92]

88) 『帰還兵の散歩』52-53 ページ。
89) 『私のなかのヴェトナム』64 ページ。
90) 『帰還兵の散歩』53 ページ。
91) 『私のなかのヴェトナム』82 ページ。
92) 『山までの街』79 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

であったと、のちに自嘲気味に回顧しているが、こうした身をあえて投棄する敢為の姿勢は、小林の生来の資質の一面でもあるようで、召集に応じた心境にもそれがあらわれている。すなわち「早くから青春の挫折を経験」し、しかも「経験の乏しさを自覚して」いた小林は、「命をかけるという決意をするなら、兵士の境遇に飛び込むことはわたくしの人生をいっきょに清新するだろう」[93]という実存的ともいえる決意によって応召したのである。

戦闘死の願望をかなえる偶然の幸運が訪れた。「総軍の兵隊に幹部候補生の試験を受ける機会を与え、その結果を見て仏印派遣軍に転属させる」という緊急措置がとられたからである。小林はその機会をとらえ、幹部候補生の第一次試験に合格し、数名の兵とともに北ヴェトナムの部隊（討兵団の正（まさ）部隊）に転属をはたした。次いで、その本拠地ヴィンエンで第二次の幹部候補生試験を受けて乙種幹部候補生つまり下士官の候補となり、一等兵に昇進したのである。[94]こうして望み通り戦闘死の舞台が整えられた。だが思わぬ事態が待っていた。

その誤算の一つは、人間らしい死に方をする前に人間らしい孤独感が待ち受けていたことである。孤独死の恐怖がそれである。

> やがて北ヴェトナムの山々を討伐をつづけながら踏み歩くようになってから、私は、故国の家族や友人たちにその場所も状況も知らされずに死ぬということのいいがたい淋しさを、ようやく噛みしめねばならなかった。ソンコイ川に東北から注ぐクレール川に臨んだ、優雅なフランスふうの小市チェンクァンにしばらく駐留していたころ、小さい丘の上で、対空監視哨として四方に目をやっていると、遠くの山々には少数民族たちのいとなむ焼き畑の煙が幾筋もしずかに立ちのぼり、真上の濃藍の空からは早朝に上昇したカボックの白い絮（わた）がいくつもいくつもゆっくりと下がってきて、それは大陸の奥地でなければ見難い眺めであったけれども、かえって、異

93) 『帰還兵の散歩』67 ページ、『山までの街』46 ページ。
94) 『帰還兵の散歩』53 ページ、『山までの街』84 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

郷に人知れず死すべき者の孤独を深く味わわせるのであった。[95)]

「焼き畑の煙」が伝える日常の暮らし、「カボックの白い絮(わた)」の精妙な自然美、それは「異郷に人知れず死すべき者の孤独」感を深めさせるものであったであろう。だがこれだけではすまなかった。原隊を離れて「他人の飯」を喰う孤兵の悲哀が孤独感をさらに募らさせた。

そのころになると、南方総軍でデスクを与えられていた兵卒という地位がどんなに恵まれたものであったかということが、痛いほど分かってきた。ヴィンエンの連隊では、私は転属を重ねてきた孤兵であり、しかも海没のおかげで素性もたしかめにくいインテリ兵であり、所属小隊では他所者であった。…私は、いわば不備のパスポートで国々を廻らざるをえない旅行者であった。(傍点竹本)[96)]

二つめの誤算は、階級がすべてであるような軍隊のなかでも、年次を重視する慣行のために昇進がなんの意味ももたなかったことである。

幹部候補生として私には特別な待遇は何ひとつ与えられず、結局、敗戦ののちまで、年次を重んじる軍のなかで実質的には正真正銘の一兵卒として過ごしたのであった。ただ、堅固な官僚組織としての軍は、さすがに私の昇進を忘れず、乙幹の私は一等兵になったが、なにぶん作戦中の中隊には新しい肩章の届くのが遅れ、私は私ですでに一等兵だと思っていたので、まだ二等兵の肩章を着けているのに古い一等兵への敬礼をうっかりして、擦れ違いざま思い切り殴られたことがある。その時の痛さはこたえた。(傍点小林)[97)]

95) 『山までの街』83-84 ページ。
96) 同、84 ページ。
97) 同、85 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

三つ目の意図しない結果は、ヴェトミンの処刑に関与させられたことである。このことはすでに言及したので繰り返さない。最後のそして最大の誤算は、切望した人間らしい死が未遂に終ったことである。小林が戦争で抱え込んだ「虚無」の最深部にはこの未遂の死があるのかもしれない。こうして軍の機構のなかでの「死に方の選択などという思い上がりはこういう惨めな結果に終わった」[98] のである。軍という官僚制社会のなかで個人的自由を獲得するという一兵士の希望は、言い換えれば官僚機構からの自主的な脱出という希望は、たとえ死を交換条件としたものであっても、幻想にすぎなかったのである。

小林によれば、こうした官僚制社会における大衆の状況は、戦後も変わることなく保持されている。たとえば、その官僚制社会の管理的支配構造に異議を申し立てたはずの 1968 年のいわゆる大学紛争にも、同じ構造が継承されて再生産されている。

> 去年、われわれの立教大学もいわゆる大学紛争の波に洗われて、経済学部の研究室の前にハンストのテントが張られた…。経済学部の教授会としても捨ててはおけませんから、二、三名の者がハンスト「決行中」の学生に会って事情を訊いてみることとなり、わたくしもその一人に加わりました。…ある喫茶店の奥に陣取っているその指導者にも出てきてもらって、ある程度の議論をしたというわけです。ところがその指導者は、ハンスト中の後輩――といってもむろん学友です――のすぐ横の席で、つよいパイプ煙草をふかすではありませんか。それを見てわたくしは心の底から憤りを感じました。ハンストにはいって 3 日もたとうとする学友の空腹は実感でもわからなければならないものであり、わかればその横でたばこを喫うことなどできるはずもないのです。この無神経が指導者というものの本質です。わたくしもあのときは思わず声が高くなってしまいました。[99]

南方総軍の M 大佐に代表される戦争指導者（高級参謀）と同じ無神経さや

98) 『帰還兵の散歩』55 ページ。

99) 同、39-40 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

無責任さが学生運動の若い指導者にも受け継がれている。こうした指導者とヒラ（大衆）との関係は、戦時・戦後期の労働運動や政治運動や平和運動にも、あるいはこうした運動だけでなく政治の場にも、そしてなによりも職場や地域社会や家庭にも広くみられるものである。その認識は、「今日のわれわれには、自由主義経済はあるが自由な経済はない。…自由主義社会もそのあらゆる被拘束の姿でしか存しない。」[100] という結論にいたるのである。公私の両領域における合理的技術による人間管理の思想と制度との浸透、つまりは官僚制社会の確立による自由の完全な空洞化、これが少なくとも戦時中から今日までの過程で確立したものである。

9. アジアへの戦争責任

戦後啓蒙といわれる思潮から小林を別けるものの一つに、アジアにたいする戦争責任の問題がある。たとえば大塚や内田にはこの視点が見られない。先にも記したように小林が自己のヴェトナム体験を語りはじめるのは 1968 年になってのことである。その動機を「ヴェトナム戦争の深刻化にともなって、わたくしの経験の範囲でヴェトナムの真実を訴えたいという希望がつよくなった」からだという。それは「こんにちのヴェトナムについてはいろいろのルポルタージュや政治的冊子が書かれているのに、太平洋戦争中のヴェトナム、ことにホー・チミンのヴェトミン（越盟党）の活動の初期の事情について物語っている文献は見あたらず、きょうまでのヴェトナム独立戦争の出発点が、日本人の立場からかならずしもはっきりとつかまれていないので、それをいくらかでも果たしておきたい」（傍点竹本）ということである。[101]

アメリカは 1965 年 2 月に北爆を開始し、1967 年 2 月には解放戦線の兵士をあぶりだすという名目で枯葉剤の大量散布を始め、戦闘員と非戦闘員との区別を問わない無差別攻撃に踏み切っていた。小林がヴェトナム体験を語り始めるのは、こうしたアメリカとその後方基地の役割をはたす日本政府とに対して批判の声をあげるためであって、決して自分史の昔語りのためではなかった。

100) 同、256 ページ。
101) 『私のなかのヴェトナム』215-216 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

だが、この時代状況へのコミットメントは小林独自な仕方で試みられた。すなわちアメリカにたいする直接的な批判よりも、むしろ日本人の歴史にたいする無知をただすことに主眼がおかれたのである。しかもそれを自分のヴェトナムにおける体験とそこでの戦争責任とを世に明らかにすることによって、いわば歴史の証言台にみずから立つことによってはたそうとしたのである。つまりヴェトナム戦争はアメリカの戦争であるだけなく、日本もまたこの戦争に歴史的に深くかかわりがあることを、自己の体験を通して語ろうとしたのである。

小林のもう一つの特徴は、上のヴェトナムひいてはアジアに対する罪責感（歴史への責任）のうえに立って、アジアの諸民族とりわけ民衆との連帯を指向しようとする視点である。この点はとりわけ賠償問題をめぐる議論によくあらわれている。アメリカのヴェトナムへの直接介入が始まる前の1959年5月13日に、日本政府と南ヴェトナムのゴ・ジン・ジェム政権とのあいだに賠償協定が締結された。調印にあたった藤山愛一郎外相は、これをもって全ヴェトナムへの賠償がなされたと述べたが、北ヴェトナム政府はこの協定の無効と、北への賠償の請求権を保持することを声明した。小林によれば、「太平洋戦争による、南ヴェトナムの損害と北ヴェトナムとの大惨禍とは、比較にならない程度のもの」[102] であり、それゆえ日本政府は北ヴェトナムの住民にとりわけ重い賠償責任を認識しなければならないのである。とくに飢饉による「北ヴェトナムの二百万の死者に賠償の責任を残している」[103] のである。したがって「南」への賠償協定の締結によって、北ヴェトナムの民衆は賠償を「横取り」されただけでなく、日本を「ふたたび自分たちの敵」とみなすことになったのである。[104] その意味で日本政府はヴェトナムにたいして戦時のみならず戦後においても政治的過ちをおかしたことになる。

ところで上の200万人という死者の数は、1945年9月2日に発せられたヴェトナム民主共和国の独立宣言のなかにみられるものである。

---

102) 小林昇「日本とベトナムの“昔”」『週刊サンケイ』緊急増刊号、1973年1月2日号、191ページ。

103) 『私のなかのヴェトナム』209ページ。

104) 同、205-206ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

フランス革命の人および市民の権利の宣言は、1789 年にやはりつぎのように宣言している。「人は、自由かつ権利において平等なものとして出生し、かつ生存する。」

これらのことはまさに否定できない真理である。しかしながら 80 年以上のあいだフランスの植民主義者たちは、自由、平等、博愛の旗を濫用し、われわれの国土を占領し、われわれの同胞を圧迫してきた。かれらのすることは人道と正義の理想とは正反対である。(中略)

1940 年秋、日本のファシストたちが連合国に対する戦闘の目的で、新しい軍事基地をつくるためインドシナに侵略してきたとき、フランスの植民主義者たちはかれらの前に屈し、われわれの国土をかれらに引きわたした。この日から、われわれ人民は日本とフランスの二重の支配をうけてきた。…その結果、去年〔1944 年〕のおわりから今年のはじめにかけて、カング・トゥリから北ヴェトナムにかけて、200 万をこえるわれわれの同胞が飢え死にした。[105)]

引用文の中略前の段落は、フランスが自由、平等、博愛の旗のもとに、ヴェトナムにたいしてその理想とは正反対の侵略行為をとり続けたことへの批判である。日本が敗戦で手を引いた後、フランスはふたたびヴェトナムに介入し、1947 年 2 月にラマディエ首相は「ホー・チ・ミン政権を相手とせず」との声明を出した。それは日本政府がかつて「爾後国民党政府を相手とせず」(1938 年 1 月の第 1 次近衛声明) と声明を発した歴史をなぞったことになる。しかし 1954 年 5 月 7 日のディエン・ビエン・フー攻防戦での敗北で、フランスはヴェトナムからの撤退に追い込まれ、同年 7 月にはジュネーヴ協定を結んだ。ここに北緯 17 度線によるヴェトナムの分断が始まったのである。同じ年の 11 月、アルジュリア民族解放戦線が武装蜂起し、ヴェトナムから撤退を始めたばかりのフランスは今度は「フランスのもの」であるアルジェリアに兵を送ったのである。

105) 高木八尺他編『人権宣言集』岩波文庫、1957 年、346-347 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

さて、ヴェトナム民主共和国の独立宣言にいう200万という死者数は過大であり、実数は50万ほどだったろうともいわれている。小林も「200万という餓死者の数について、〔独立〕宣言の発表の時期に、どの程度まで正確に調べることができたのかという疑問が残る」と認めているが、それでも「宣言ののちにも餓死者とコレラによる病死者とは続出したのであって、わたくしは46年4月にハイフォンで乗船するまでの期間にも、いたるところで死者を見た」[106] といっている。いずれにしても正確な数を把握することは至難の業であろう。それゆえ「200万の死者を50万と訂正してみたところで、ヴェトナム（ことに現在〔1970年〕の北ヴェトナム）に対する日本人の罪責がいくらかなりとも軽くなるものではない」[107] のであり、数字の正確さのみに拘泥することは、事の重大さから目をそらしその本質を見失うことにもなる。こうした戦争責任の考えに立って、アジアの人々との連帯感は、過去の罪責感と一体のものである場合にのみ、相互的なものになると主張される。

> アジアの諸民族に寄せるわれわれの連帯感…は、アジアの諸国に対するわれわれの罪責感と一体のものでなければ、たとえどんなイデオロギーに立とうとも、日本人はふたたび卑小な指導者意識に毒されることとなるであろう。過去の世代の罪責は自分たちには関係がないと若い世代が主張しても、アジアの諸民族はそれを軽薄であり鈍感であるとしか受取らないにちがいない。[108]

同じ観点から小林は、1968年のいわゆる5月革命のさいに、ヴェトナムの旧宗主国であるフランスの若者が「ヴェトナムのことはもう古い」と言い放ったことにも、そこにヨーロッパ人の抜きがたいアジア蔑視（今日風にいえばオリエンタリズム）をかぎ取り、批判的な眼を向ける。[109]

---

106) 小林昇「研究者の春愁」別冊『潮』春季号、1970年4月20日、197ページ。
107) 同、197-198ページ。
108) 同、195-196ページ。
109) 『私のなかのヴェトナム』211ページ。すべてのヨーロッパ人がフランスの若者のような歴史

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

そして他国の民衆との連帯の思いは、佐藤清の『画文集 シベリア虜囚記』に寄せた文にも表わされている。小林は、「日本軍部のゆえに…スターリンの俘虜となった日本の兵隊たち」(傍点小林) の一人である佐藤と、これも「スターリンによる囚人である〔シベリアに流された〕ロシアの民衆」との連帯の可能性とを読みとろうとする。

> この画文集は、何よりもまず、重く動かしがたい事実を証言する。それは当然、権力による歴史の捏造を許さぬ、告発の書である。だが、ここに示されている告発者の、庶民としての土性骨の太さと、旧満州やロシアの民衆を見る目の温かさや親しさと、タイガ (深林) の春をよろこぶ素直なこころとは、真の告発の意味についてわれわれに多くのことを悟らせるであろう。そうしてそこから必然に、権力にたいする、国境をこえた人民の連帯ということを深く考えさせるであろう。(傍点小林)[110]

さて、賠償問題は日本の過去の植民地主義の「清算」の仕方、いわば戦後責任にかかわることであり、小林の論はそれに対する一つの態度表明である。そしてこれは推測の域を出ないのだが、1965 年に結ばれた日韓基本条約にたいする小林の態度を示すものでもあるのかも知れない。賠償問題を越えたさらに広い戦争責任については、小林が強い罪の意識を背負って戦後を生きつつけたことをすでに論及したので、繰りかえさない。ただ歌人でもある小林の“「東京裁判」試写”と題された数首のなかから二首を以下にひく。小林は「実感を言葉に定着させて他人の感動をひきおこすための修練は、すなわち思想の修練であり、…わたくしの専門の上でのいろいろな研究は、深いところで自分の作歌体験とつながっている」といっているからである。[111]

認識をもっているわけではない。2005 年 1 月 25 日、ドイツ首相ゲアハルト・シュレーダーは、アウシュビッツ等の強制収容所解放 60 周年を記念する会で演説し、ホロコーストに直接的な罪を負っていない現在の世代も、国家社会主義の戦争と民族虐殺とを心に刻む責任があること、そして忘れたり、記憶を抑圧したりする自己誘惑に負けないようにすることを訴えた。

110) 小林昇「寄せることば」佐藤清『画文集 シベリア虜囚記』未来社、1979 年、7 ページ。

111) 小林昇「生きている短歌」『国語通信』筑摩書房、120 号、1969 年 10 月、『帰還兵の散歩』収録、同書 194 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ヴェトナムに兵として拒みかねしこと秘めて来りつ三十八年
刑されて異土(ことつち)に伏しし兵たちよ大元帥は赦されてあり[112)]

10. 再帰する国家

これまでの議論において自由は、国家権力とりわけその官僚制的な管理体制との関連で捉えられていた。ところが小林には自由をみずからの存在との関連でみる注目すべき論述がある。

戦争に駆り出されるまえは、わたくしも人並みに（？）、試験の夢というものをときどき見た。(中略）ところが、復員してからのわたくしには試験の夢は訪れなくなり、軍隊生活の夢がそれに代わった。しかし、輸送船を魚雷で沈められて南シナ海を漂った場面とか、奥地の淋しい川谷での討伐戦の場面とか、場所と時刻とを選ばずにくりかえされたリンチの場面とか、敗戦後のひととき生活していた岩山の蔭の荒れた草原の場面とかは、それぞれの記憶と印象とがあざやかであるにもかかわらず、いっこうに夢に現れてこない。ただ、ふつうの兵隊生活のなかにいて、戦争は終わっているのに兵隊としての義務からは解放されずにおり、しかもいつ除隊になるかを誰も約束してくれないという夢が、云いようもなく深いもどかしさをともなって、さまざまヴァリエーションで現れるのである。…こういう夢を幾度も見るのは、**戦争中の兵隊としての拘束よりもむしろ、敗戦から復員までの、自由な世界のなかでの例外的な拘束が、わたくしにとってどんなに苦痛だったか**と云うことの証拠だと思われる。(中略)

帰還後のわたくしはもとの職場に戻ってなんとか研究に沈潜することができ、しかも思うところがあって、ことさら地味な仕事を今日までつづけてきた。…わたくしの研究生活にはつねに一刻の時間も惜しまれた…。戦後のわたくしの生活は、結局のところ、自分で自分の自由を極端に縛るこ

112) 小林昇『歴世――小林昇全歌集』不識書院、2006 年、414 ページ（歌集『百敗』角川書店、1991 年に初収。）

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

とであった。そうしてこんにちのわたくしの実感では、**自由の拘束は、それが自発的におこなわれた場合にも、魂の奥深いところにあたえる影響という点では、強いられた拘束と存外に似た点を持つ**ものである。わたくしはこのことにようやく気付いて、そこに人生の秘密のようなものを感じ、研究者の運命を感じるとともに、それとは別に、わたくしの個人の宿命と或る種の悔恨とをも感じている。(傍点小林、ゴシック竹本)[113)]

ここでは二つのことがいわれている。一つは、客観的にみれば敗戦によって死の運命から解放された状況におかれながら、なお除隊（帰国）の時期もわからぬまま兵としてヴェトナムにとどめおかれる状態のほうが、従軍中の「奴隷」としての完全な拘束状態よりもはるかに強い苦痛を生じさせたということである。いうなれば既決囚としての拘束よりも未決囚としての拘禁のほうが囚人にとってよりいっそう精神的ダメージが大きいということである。もう一つは、復員後の研究に専念する日々の連続が結局は自由の自己拘束に帰結し、自由の喪失という点では他者による強制的拘束と変わらなかったということである。これも喩えれば、出獄後の元囚人の禁欲的で模範的な更正生活は、精神にたいする抑制的な規律化作用という点では、下獄中の日々と実質的に変ることがないということである。つまり、自由は拘束や規制が撤廃されれば獲得されたり回復されたりするとは限らず、たとえ規制が撤廃されたあとでも、みずからの自発的行為が自由の喪失を生み出しうるということである。そうだとすれば、自由と規制という二元論だけでは自由をとらえきれないこと、いいかえれば自由を特定のある状態とアプリオリに規定できないということを意味する。いっそう切実なことは、アウシュビッツ強制収容所の門にかかげられた標語、「労働は自由を生む」（ARBEIT MACHT FREI）のアイロニーがユダヤ人や政治犯や戦争捕虜だけのものでなく、勤勉な近・現代人に普遍的にあてはまるものであることを、小林が身をもって示したことである。

さて、絶対的不自由の世界での完全拘束よりも自由な世界での拘束のほう

113) 『私のなかのヴェトナム』156-159 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

がよりいっそう自由と解放とにたいする渇望が深く、また後者の自由な世界での他者拘束と自己規律による自己拘束とが不自由さにおいて変わらないとすれば、自己規律を捨てるしか自由を回復できないのだろうか。あるいはそれとは別の回路で自由を根源的に獲得する手立てはあるのだろうか。小林自身はそれに答えることなく、そうした事態をみずから引き寄せた「研究者の運命」と「わたくし個人の宿命」とを受け入れつつ、そのことに「或る種の悔恨」をもらしている。

上で小林個人の宿命と悔恨というのは、戦争で失われた青春とヴェトナムでの苦く重い体験のことを指しているのは想像に難くない。とりわけ南方総軍という官僚制からの自己解放の試み（死の自由の選択）が、総体としての軍機構のなかで空まわりし、奴隷状態の継続にしか終わらなかったという経験は、応召以前に大学教員という「逃亡奴隷」[114] の境遇を選択した小林にとって、皮肉な「宿命」と受けとめられたであろう。また上で研究者の運命といっているのは、小林の研究者像とかかわることである。すでに述べたように、一期の旅をしつくしたとする小林は、もはや旅には身を委ねまいとした。この決意は非日常への逃避をしりぞけるとともに、他方で抑制的な自己規律へとみずからを導くことになったと思われる。

小林が研究者の運命というときの研究者は、たんなる研究者ではなくむしろ専門家のことであった。「専門家というのは自分で獲得し開拓した知識の領域を確実に支配していて、諸知識の有機的な綜合のためには、その人の存在が不可欠であるような学者」[115] のことである。そうした専門家であれば、「たと

114) 小林昇「スミスとリスト」『社会科学の方法』（御茶の水書房）13 号、1970 年 1 月、『帰還兵の散歩』収録、同書 78 ページ。伊藤整は日本の知識人の一般的特性を「逃亡奴隷」のそれと表現した。「私は文士を日本の社会の逃亡奴隷だと考える。鷗外のような、交わるべき俗物的社会を持ち、比較的よい物質的生活条件と社会で紳士の地位を持つが故に告白的自伝がみずからに禁ぜられるというヨオロッパ風な立ち場にあった例外を除けば、一般の日本の文士は逃亡奴隷であり、仮面の必要はなく、執着する世俗的約束を持たなかった」し、またマルクス主義者たちも「理論上は現世意識の拡大であるが、実質的には日本の現世に働きかける力のない理想主義的な忍苦的な実践生活者で…絶望的な陰謀を抱く逃亡奴隷」なのである。伊藤整「逃亡奴隷と仮面紳士」『新文学』第 5 巻第 8 号、1948 年 8 月 1 日。同『小説の方法』岩波文庫、2006 年、308-309 ページ。

115) 前掲「研究者の春愁」200 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

え研究領域にかんする自己限定の点できびしく禁欲的ではあっても、かならず広大な視野をみずからのものとしているはずである。」なぜなら「井戸は深く掘れば掘るほど、幾すじもの遠くからの地下水に出合う」からである[116)]。こうして専門家とは、広い視野と深い学識とをもち、それぞれの専門領域における諸知識の綜合のために、あるいは学問全体の進展のために不可欠の学者のことなのである。そうだとすれば、日本の大学で、「研究者と呼ばれるのにふさわしい人びとは少なく、専門家の名に値する人びとはそれよりもいっそうすくない」と嘆ずるのも無理からぬことである。だが、素人や半可通とは狎れあわず、かれらの浅薄な理解や甘い賞賛も、あるいはかれらに対する迎合も疎んずるとすれば、その玄人（専門家）は素人（大衆）とのあいだに一定のしかし厳しい距離をおかざるをえないであろう。そうして得られる専門家の名誉（？）が、おのれの自由を代償として差し出さざるをえないとしたら、たしかに専門家の運命とは孤独で奴隷的なものにならざるをえない。

ところで小林が専門家という職業態度を重んじたのは、研究や学問が政治にやすやすとからみとられたり、移り気なマスコミや大衆に浪費されて使い捨てられることを恐れたからだと思われる。だが、専門家のそうしたアマチュア化（低俗化）を避けえたとしても、その専門家や知識が社会の支配構造のなかに入れ子状態で組み込まれ、それ自身が支配装置にならないという保証はない。むしろ現状はそのようなものとして制度化されているともいえよう。それをどのように回避しうるか、それは近代の知のいまなお未決の問題である。本項冒頭の引用文に続けて「老いがふかまるころにはいつか研究者としての生活が、どうにもならないやるせなさで夢に立つようになるのではなかろうか。」[117)] という予感が記されているが、このことはすでにして小林が、現代の研究者が内に抱え込む深淵を覗きみていたことを暗に示している。

11. 近代主義批判

戦地において、国家には根源的な悪が内蔵されているという倫理的体験をえ

116) 同、203 ページ。

117) 『私のなかのヴェトナム』159 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

て、そこから国家と個人あるいは権力と自由との問題を見すえた小林は、帰還後の自分の営為（研究への専心）が自分自身の自由を圧殺する自己権力を生み出すことを発見するにいたった。それは一つの不条理である。丁度そのころ、「われわれはまた、体制のいかんを問わず『国家』に人類の危篤状態を癒やす力があるかどうかを、まもなく真剣に考えなくてはならなくなるであろう。」[118] という刺激的な考えが表明される。また前に引用したが、「およそ権力と偏見との拠りどころである国家というものをどうすれば死滅させうるであろうか。」とも語りかけている。しかしこうした予感や問いかけという控え目な表現をとって提出された問題は、自由と権力（他者権力と自己権力）との問題の文脈で語られたものではない。これとは別の、国家に守られながら暴走し続ける近・現代の科学文明にたいする危機意識によるものである。上の二つの文が配された箇所をみてみよう。

> 人類そのものの肉体と精神とを崩壊させようとする近代科学文明は、核戦争の可能性によって、また各種の公害の顕現化によって、人類をいま最大の危機のなかに立たせている。科学文明にはもう希望はない——みずからの手でみずからを癒やすという希望を除いては。だがそのばあいにも、魂と精神とがこの仕事に手を貸すことがどうしても必要であろう。社会諸科学もまた、この問題に対してはみずからの既成の諸体系の限界を認識しなければならない。たとえば公害は「外部不経済」などを越えた問題なのである。そうしてわれわれはまた、体制のいかんを問わず「国家」に人類の危篤状態を癒やす力があるかどうかを、まもなく真剣に考えなくてはならなくなるであろう。[119]
>
> さしあたってこんにちのわれわれは、過剰となってしまったGNP的生産力をどうして処理したらよいであろうか（人類ということばにあたえられるべき定義の一つは、依然として「飢えたる存在」である）。資本主義に雇用の低下と社会的福祉との共存を要求しうるであろうか。社会主義に

118) 『帰還兵の散歩』11ページ。
119) 同、11ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

おける官僚支配は避けうるであろうか。およそ権力と偏見との拠りどころである国家というものをどうすれば死滅させうるであろうか。[120)]

知識とテクノロジーの無限の開発に社会の発展可能性をかけようとする近代の科学文明にたいする素朴な信仰、その結果としての生産力の過剰、さらにそれをおし進める国家とそれを支える自然科学や社会科学にたいする懸念と不信、これが生還から四半世紀後すなわち 1970 年頃の小林の辿り着いた心境である（このことは専門の経済学史研究にも微妙な影響を与えたのだが、それは稿をあらためて検討すべき事柄である)。しかしこの一種の近代主義批判あるいは啓蒙主義批判の観点は、かならずしもこの時に芽生えたものではない。応召する前の若い時代にすでにみられる。1941 年（昭和 16 年）に出版された柳宗悦の『工芸』についてこう語っている。

この本は、当時流行していた、西欧近代文明批判のあらゆる言説〔近代の超克論や世界史の哲学など－竹本〕とちがうところに立論の基礎を据えており、こんにちでもその迫力を失わない。それは近代芸術における個性の尊重に対して、「用」に即した職人の技術の成果がむしろ優越するという事実を、日常の用具に即し目でたしかめて指摘したもので、この事実の基礎を、生活→生産や労働の反復習熟のなかにこそ個性の到りえぬ超越者の示現が見られるという点に求めたものであった。[121)]

柳のこういう主張が、芸術論の局面からする疎外論であり、「資本制度」への批判であり、同時に進歩主義と近代化とへの深い警告であることは、「戦時下」に生きていた若いわたくしの胸を打った。…美も人間も、個人の理解を越えて限りなく奥深い存在なのである。(傍点小林)[122)]

120) 同、23 ページ。

121) 小林昇「こけしの美学」『こけし手帖』200 号、1977 年 11 月、『帰還兵の散歩』収録、同書 249 ページ。

122) 小林昇「柳宗悦『工芸』――わたくしの書架から――」『経済セミナー』289 号、1979 年 2 月号、『帰還兵の散歩』収録、同書 223 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

生活の日常の「用」に供する用具、そしてそれを産み出す高い技術や反復的労働の尊重は、近代の個性尊重主義を超えた「美と人間」の永続性にたいする信頼から生まれたものである。この柳の主張に共感した若い小林は、近代の科学文明とそれにつきまとう進歩主義とにたいする疑念を深めた後（のち）の小林とつながっている。また官僚制社会とは、支配の技術——それは社会の操作可能性の思想に裏づけられている——の洗練化（合理化）の過程でもあるから、すでにみた青年期以降の小林の官僚制批判は、技術を人間の主体的（生産的）実践ととらえる武谷三男や星野芳郎らの技術論（生産力理論）にたいする批判をも含意している。こうして青年期、壮年期そしてそれ以後を貫くひとつの思想をみいだすことができる。それは権力論にもとづく閉塞的な人間状況の認識と共振しながら、「われわれはともかくいま、破滅の淵から引き返す道を捜しているのである。」[123] という、現代にたいする危機意識にまで高まる。「マイナス成長のすすめ」という反時代的な、あるいはむしろ反近代的な表題をもつ文が綴れたのは、そのあらわれといえよう。この論文は 1979 年に書かれたものであるが、そのなかに 10 年後の天安門事件や四半世紀後のこんにちの中国を見通すかのような文がある。

> われわれはどうしてそれまでして GNP を増加させねばならないのか。中国の近代化がスムーズに進行するとわたくしは思わないけれども、もしそれが計画を達成するとしたら、21 世紀の初頭には中国の一人当たりの国民所得が現在の日本のそれと等しくなるという試算がある。そのときには、日本の隣に 10 個の日本が併存することになる。地球の資源と環境とはそのときどうなるだろうか。（傍点小林）[124]

さらに、この論文の次のような論説にも注目したい。「現代の日本人は国民国家としての自立をはたして真剣に望んでいるのだろか」と自問し、寺山修司

123) 小林昇「マイナス成長のすすめ」『エコノミスト』1979 年 8 月 21 日号、『帰還兵の散歩』収録、同書 259 ページ。

124) 同、254 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の人口に膾炙した歌＜マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや＞を引用する。そして言う。

> この歌に同感をもよおす若い人々は、日本人の間に多いのではなかろうか。しかしそうであるなら、自衛隊を「増強」したとていっさいはむだである。それは戦う軍隊になれない。(中略) 日本の自衛隊はなんの機能をはたすためにあるのだろうか。もしもソ連の「脅威」に対抗できる軍隊を日本が持とうとするのであれば、結局は核軍備にしかその道はなく、しかもその核軍備とて、劣位にとどまらざるをえないであろう。[125)]

いうまでもなく、これは自衛隊の核武装化を暗に提唱しているものでもなく、自衛隊の増強によって国民国家としての日本の自立を促そうとしているのでもない。この引用文にただちに続けて、「われわれはともかくいま、破滅の淵から引き返す道を捜しているのである。」という先に引用した文が書き留められていることからも、そのことは確かめられる。この人類的な規模での「破滅」をもたらすものは核兵器だけではない。これまで見てきたように暴力、飢餓、官僚制的支配の浸透、自然破壊など多様である。

おわりに

小林は自分の戦争体験はあくまでも個人的な体験であること、そして細部の記憶については不確かな点も残ることをことわったうえで、次のようにいっている。

> わたくしはいまむしろ、「記憶の本来のはたらきは、正確な想起というよりも、空想や想像のはたらきであって、この場合大切なのは物語でありドラマである」というデューイのことばを思いおこしている。しかもわたくしの記述はとうていドラマまではふくらまなかった。奴隷や兵隊にドラ

125) 同、259 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

マはあり得ないからである。[126)]

なるほど小林の戦争体験は戦争全体からみれば局所的なそれであり、またその体験のすべてが正確に記憶されたわけでもないのかもしれない。そもそもそれは不可能なことである。大事なことは記憶のなかから意味のある出来事をみつけだしたり、あるいは眠っている記憶のなかから意味のある出来事を甦らせたりして、それに明確な輪郭を与え、自分のモノにすることである。その点で小林の体験の論述は、一つの骨肉化された思想あるいはそのトルソの表出になっている。それは「戦争の体験を自分の研究生活に背負いつづけてきた」とみずからいうように、その個人的な体験から離れず、そうすることで“虚無のなかの生”のアクチュアリティを見いだそうとしたことによる。そのことは村上一郎の岩波茂雄評を思い起こさせる。

〔岩波茂雄は〕体をはってたたかわなかった事実も含めて、自分のえらんだ道をかみしめ、その上に立って何かをしようとしている人間なのであるが、つぎにえらぶ道は、やはり大きな回心の上に飛躍するものではなくて、有とも無ともつかぬうじうじした現実へのなずみ、なりゆきに沈んでゆくかのようである。岩波の思考力が強いとか弱いとの問題ではない。思考は一見弱くとも、ここの一点だけを明晰化しえていたら、おのれに矛盾はありつつも、或る翻転が可能であるのにと、思えるところで、彼は思考をアクチュライズしてゆくことをやめてしまうのである。そして、だから「命をすて」ずに「自明の理」を「自明」たらしめて、成功しえた。[127)]

岩波を批判することが引用のねらいではない。ある一点に踏みと止まってその思考をアクチュライズする、そこからその人の思想は拓けるのだ、という村上のこの言が小林の戦争体験の反芻にあてはまると思うからである。肥前栄一が指摘するように、「人は深淵を覗き苦悩を担えば直ちに何者かになれる」ほ

126) 前掲「チェンクァンの記」304 ページ。
127) 村上一郎『岩波茂雄』砂子屋書房、1982 年、79-80 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

どおめでたい存在ではなく、その体験がその人の人間的価値を形成するにいたるためには、「自己の不幸に与える意味づけとそれにもとづく行動力とその方向とが」求められるのである。[128] そうすることで、丸山眞男のいう「ただ読書や観念的発想によるのではなしに、どこまでも彼の経験をくぐり、彼の行動によって験証されながら進んで行くような性質」の思想の展開がえられ、そこに「一人の人間の生活過程が同時に思想史としての意味をもつ」条件が切り開かれるのである。[129]

小林によれば、「高校以来のわたくしは柳宗悦や鷗外に親しみ、デカルトやヴァレリーを翻訳で読んで、思想とは文体であることを感得した」[130] のであるが、戦争体験は小林の人間的価値をつまりは文体を確立させ、そこから戦中から戦後の日本の社会と支配的な思想とにたいする批判意識を成熟させたのである。そしてごく近年には、戦地で「遠つ明治」と口の端にのせたその明治にまで批判的な眼を届かせ、明治人鷗外の高級官僚としてのもう一つの顔に疑問を投げかける。陸軍軍医総監から陸軍省医務局長へと医務官僚としての頂点を極めた鷗外（森林太郎）は、他方で陸軍における脚気患者とそれによる死者との大量発生という現実を前にして、その白米原因説を頑なに斥けて対策を放置し、患者の苦しみとそれに伴う死者とを無用に増やした責任が問われなければならない、という。

> 私は自分の戦争体験と、ことに昨今の日常的体験とにもとづく、近・現代を一貫する日本の官僚制度の深い無責任という本質の認識とを、鷗外その人についてもあらたにしないわけにいきません。そうしてそれは日本の啓蒙思想と近代化思想とを、少なくともその軽視できない局面を、深刻に表面化する問題と思われるのです。(傍点小林)[131]

128) 肥前栄一「出会いのころ」『小林昇経済学史著作集』第 1 巻「月報」1976 年 1 月、7 ページ。
129) 丸山眞男「野間宏君のことなど」『野間宏作品集』第 3 巻、三一書房、1953 年、「月報」3。『丸山眞男集』第 6 巻、岩波書店、1995 年、9 ページ。
130) 前掲「内田義彦著『作品としての社会科学』(1981 年) を読む」389 ページ。
131) 小林昇「森鷗外研究の新課題――鷗外文学の脚気対策問題――」『日本学士院紀要』第 58 巻 2 号、2003 年 2 月、90 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

こうして明治から今日までの日本社会に一貫する官僚制度にあらためて眼が向けられる。それは、「多くの無告の死者の側から、またこれらの死者の同時代人から」[132] 放たれている問いと受けとめるからである。

最後に、短歌についての小林の論に触れておこう。島木赤彦『十年』のなかのある一首とそれを下敷きにした中村憲吉の『軽雷集』との一首とを並べて、「憲吉のこの本歌取りの作品もまた秀吟であり、しかも赤彦の作品とは境地をまったくことにしているといえよう」と評価して、「短歌についてさえ、普遍的立言をこころみることの意義は小さい」と結論づけている。[133] この短歌における本歌と本歌取りとの関係が、各種の古典と古典研究者との関係にも擬することが許されるとすれば、たとえば経済学の古典についても短歌と同様に「普遍的立言をこころみることの意義は小さい」のかもしれない。ただ、解釈はたとえ古典を超えることはできないとしても、解釈者もまた古典作者とは「境地」を異にした意味のある解釈作品を生みだしうる余地はあるだろう。ある古典もそれに先行する古典の一種の解釈でないといいきれないからである。そうだとすれば、それは遅れてきた者にとっては一つの生の手がかりであり、また希望ともなろう。漢学にいう文学と英文学にいう文学との違いという問題に直面し、両者を統合する普遍的な文学の基準の発見に煩悶しつづけ、ついに「自己本位」というみずからの文学的、思想的立脚点をみいだした漱石のように、[134] われわれも自運のためにはまず臨書での鍛錬がいるのであろう。それにしても小林の戦後の研究が経済学史——しかもそのなかでも時代遅れやディレッタンティズムとみなされやすい 18・19 世紀の経済学——に限定され、そこから逸脱することがなかったのは、古典のもつ目にみえない蘇生と再生の磁力が、時代に対してだけでなく人に対しても作用するからだと思われる。

他方で小林は、いまや「人間的なあらゆる思想の源」である「絶対者への敬虔という感情はようやく涸れる尽くそうとしている」[135] という。この思想の

132) 同、91 ページ。
133) 小林昇「十年」、『十代に何を読んだか』未来社、1985 年、107-108 ページ。
134) 前掲夏目漱石「私の個人主義」109-118 ページ。
135) 『帰還兵の散歩』256 ページ。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

終焉をも予見する終末論的認識が正鵠を射ているとすれば、流行にのった思想や解釈のにぎにぎしい陳列も絶対者を見失った末の虚妄ということになるのだが、それでも上の文には、普遍的なものにたいする回生の期待が秘められているように思われる。それは、神や仏という絶対者をわれわれの胸に呼び戻すことによるのか、あるいは戦争における無告の死者という絶対者をわれわれ一人一人の生と死とに重ね合わせてわが事とすることによるのか、それとも別の回路によるのか。それはもはや小林一人の問題ではない。

NII-Electronic Library Service